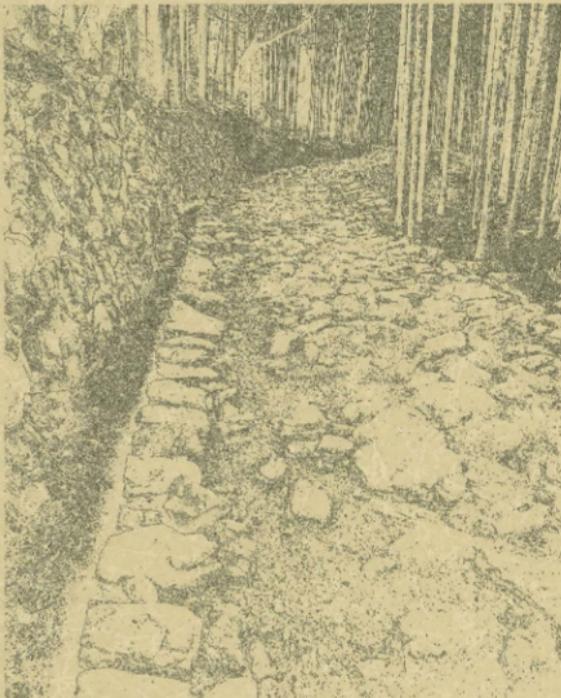


# 山陰道

(野坂峠越・徳城峠越)

発掘調査報告書



2008年7月

島根県 津和野町教育委員会

# 山陰道

(野坂峠越・徳城峠越)

## 発掘調査報告書



2008年7月

島根県 津和野町教育委員会



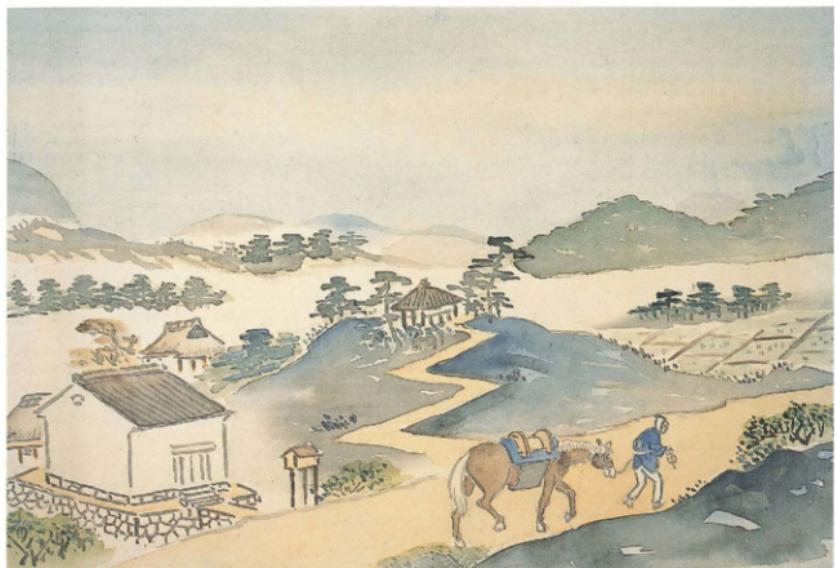
野坂峠



野坂峠



徳城峠



「津和野百景 第3巻」より 「六十二、中座庚申堂」



「津和野百景 第5巻」より 「八十九、青原駅」

## 序 文

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。今回、山陰道の発掘調査をおこないました。調査の結果、江戸時代の街道が良好な状態で存在していることが明らかとなり、当時の土木技術を知る上でも貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財の保護および埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・社会教育・学術研究の一資料として活用していただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご理解・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成20年7月

津和野町教育委員会

教育長 斎藤 誠

# 例　　言

1. 本書は、平成18年度において、島根県津和野土木事務所の委託を受け実施した「一般県道柿木津和野停車場線中座工区新世紀道路（改良）工事」地内の発掘調査と、平成19、20年度に文化庁の補助を受けて調査した山陰道（野坂峠越・徳城峠越）の調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	文化庁文化財部記念物課	文化財調査官	山下 信一郎
	島根県教育委員会文化財課		
	広島県立美術館芸術課長	村上 勇	
	梅光学院大学教授	渡辺 一雄	
	元島根県歴史の道調査委員	池橋 達雄	
	津和野町文化財保護審議会	会長 松島 弘	
		副会長 村上 遼	
事務局	津和野町教育委員会	教育長 斎藤 数弘	(平成19年12月5日まで)
		斎藤 誠	(平成19年12月6日から)
		教育次長 岩石 修	
		文化財係 米本 潔	
		宮田 健一	
調査員	津和野町教育委員会	文化財係長 中井 将胤	
調査補助員	永田茂美 棚木敦子	麻野 遙	
調査参加者	佐伯昌俊 森川リユ子	岩本光子 弘奥長生 久保政幸	
	大井将正 坂本勝義	永田 恵 森本定見 長嶺裕貴	
	倉谷宗征 鹿野淳一		

3. 発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、関係機関の方々にもお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。また、発掘現場においては、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、位置図などは1/25,000、1/50,000を使用し、現地における基準点測量及び地形図1/20、1/200、1/500、1/1,000は、株式会社ワールドに委託して作成したものを使用した。

5. 調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

6. 本書は宮田・永田・棚木・佐伯・麻野氏の協力のもと、中井将胤が編集にあたった。

# 目 次

## 第1章 総 括

第1節 津和野町の概要 .....	1
第2節 津和野町の歴史 .....	2
第3節 津和野町内における山陰道の概要 .....	5
第4節 調査に至る経緯と経過 .....	5

## 第2章 野坂峠越

第1節 地理的環境と歴史的環境 .....	7
第1項 地理的環境 .....	7
第2項 歴史的環境 .....	8
第2節 調査方法と調査区の設定 .....	10
第1項 調査方法 .....	10
第2項 調査区の設定 .....	10
第3節 調査の概要 .....	12
第1項 第1調査地点 .....	12
第2項 第2調査地点 .....	16
第3項 第3調査地点 .....	36
第4項 第4調査地点 .....	41
第5項 第5調査地点 .....	48
第6項 第6調査地点 .....	59
第4節 土質調査 .....	60
第1項 調査目的・調査内容 .....	60
第2項 調査方法 .....	60
第3項 調査結果・考察 .....	60
第5節 まとめ .....	64

## 第3章 徳城峠越

第1節 地理的環境と歴史的環境 .....	65
第1項 地理的環境 .....	65
第2項 歴史的環境 .....	66
第2節 調査方法と調査区の設定 .....	68
第1項 調査方法 .....	68
第2項 調査区の設定 .....	68
第3節 調査の概要 .....	70
第1項 第1調査地点 .....	70
第2項 第2調査地点 .....	70
第3項 第3調査地点 .....	75
第4節 土質調査 .....	76
第1項 調査目的・調査内容 .....	76
第2項 調査方法 .....	76
第3項 調査結果・考察 .....	76
第5節 まとめ .....	83

## 挿図 目次

第1図	津和野町位置図	1
第2図	山陰道位置図	3-4
第3図	野坂峠越 「正保図絵図」より抜粋	6
第4図	野坂峠越 縦断面図	7
第5図	野坂峠越 横断面図(番所・口屋付近)	7
第6図	野坂峠越 周辺の遺跡分布地図	9
第7図	野坂峠越 調査区位置図	11
第8図	元禄期 津和野城下待屋敷明細図	12
第9図	津和野城下町絵図(栗本格斎筆)より抜粋	12
第10図	野坂峠越 第1調査地点路面実測図	13-14
第11図	野坂峠越 トレンチ1土層堆積図	15
第12図	野坂峠越 トレンチ4上層堆積図	16
第13図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(1)	17-18
第14図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(2)	19-20
第15図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(3)	21-22
第16図	野坂峠越 トレンチ6土層堆積図	23
第17図	野坂峠越 トレンチ7土層堆積図	23
第18図	野坂峠越 トレンチ8土層堆積図	24
第19図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(4)	25-26
第20図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(5)	27-28
第21図	野坂峠越 第2調査地点路面実測図(6)	29-30
第22図	野坂峠越 遺物実測図(1)	32
第23図	野坂峠越 遺物実測図(2)	34
第24図	野坂峠越 トレンチ11土層堆積図	36
第25図	野坂峠越 第3調査地点路面実測図	37-38
第26図	野坂峠越 トレンチ15土層堆積図	39
第27図	野坂峠越 トレンチ13実測図	40
第28図	野坂峠越 トレンチ17実測図	41
第29図	野坂峠越 トレンチ18横断溝実測図	42
第30図	野坂峠越 第4調査地点路面実測図	43-44
第31図	野坂峠越 番所跡平面実測図	46
第32図	野坂峠越 遺物実測図(3)	47
第33図	野坂峠越 トレンチ20実測図	48
第34図	野坂峠越 第5調査地点路面実測図(1)	49-50
第35図	野坂峠越 第5調査地点路面実測図(2)	51-52
第36図	野坂峠越 トレンチ21平面実測図	53

第37図	野坂峠越	トレンチ22平面実測図	53
第38図	野坂峠越	トレンチ23実測図	54
第39図	野坂峠越	第6調査地点路面実測図（1）	55-56
第40図	野坂峠越	第6調査地点路面実測図（2）	57-58
第41図	野坂峠越	石垣立面図（明治期）	59
第42図	津和野百景「野坂峠」（栗本格斎筆）		64
第43図	徳城峠越	継断面図	65
第44図	徳城峠越	周辺の遺跡分布図	67
第45図	津和野百景「徳城峠」（栗本格斎筆）		68
第46図	徳城峠越	調査区位置図	69
第47図	徳城峠越	トレンチ1土層堆積図	70
第48図	徳城峠越	トレンチ2土層堆積図	70
第49図	徳城峠越	第1調査地点路面実測図（1）	71-72
第50図	徳城峠越	第1調査地点路面実測図（2）	73-74
第51図	徳城峠越	トレンチ3土層堆積図	75
第52図	徳城峠越	トレンチ4土層堆積図	75
第53図	徳城峠越	トレンチ4石垣立面図	76
第54図	徳城峠越	第2調査地点路面実測図	77-78
第55図	徳城峠越	第3調査地点路面実測図（1）	79-80
第56図	徳城峠越	第3調査地点路面実測図（2）	81-82
第1表	野坂峠越	出土遺物觀察表①	33
第2表	野坂峠越	年代測定分析表	35
第3表	野坂峠越	番所付近出土遺物觀察表②	47

# 図版 目次

図版 1	野坂峠付近鳥瞰	.....	85		
図版 2-1	第1調査地点近景	2-2	口屋跡付近	.....	86
図版 3-1	トレンチ1完掘状況	3-2	東側石垣(1)	.....	87
図版 4-1	第2調査地点北半(調査前)	4-2	第2調査地点北半(調査後)	.....	88
図版 5-1	第2調査地点北半(調査前)	5-2	第2調査地点北半(調査後)	.....	89
図版 6-1	第2調査地点北半(調査前)	6-2	第2調査地点北半(調査後)	.....	90
図版 7-1	第2調査地点北半(調査前)	7-2	第2調査地点北半(調査後)	.....	91
図版 8-1	第2調査地点南半(調査前)	8-2	第2調査地点南半(調査後)	.....	92
図版 9-1	第2調査地点南半(調査前)	9-2	第2調査地点南半(調査後)	.....	93
図版 10-1	トレンチ4土層検出状況1	10-2	トレンチ4土層検出状況2	.....	94
図版 11-1	トレンチ5土層検出状況1	11-2	トレンチ5土層検出状況2	.....	95
図版 12-1	トレンチ6完掘状況1	12-2	トレンチ6完掘状況2	.....	96
図版 13-1	トレンチ7土層検出状況1	13-2	トレンチ7土層検出状況2	.....	97
図版 14-1	トレンチ8土層検出状況1	14-2	トレンチ8土層検出状況2	.....	98
図版 15-1	トレンチ10土層検出状況1	15-2	トレンチ10土層検出状況2	.....	99
図版 16-1	第2調査地点南半 東側石垣検出状況1	.....	100		
	16-2	第2調査地点南半 東側石垣検出状況2	.....	100	
図版 17-1	第3調査地点北半(調査前)	17-2	第3調査地点北半(調査後)	.....	101
図版 18-1	第3調査地点南半(調査前)	18-2	第3調査地点南半(調査後)	.....	102
図版 19-1	トレンチ11土層検出状況1	19-2	トレンチ11土層検出状況2	.....	103
図版 20-1	トレンチ13完掘状況	20-2	トレンチ13土層検出状況	.....	104
図版 21-1	トレンチ14完掘状況	21-2	トレンチ14土層検出状況	.....	105
図版 22-1	トレンチ15土層検出状況	22-2	トレンチ15土層検出状況	.....	106
図版 23-1	トレンチ16土層検出状況1	23-2	トレンチ16土層検出状況2	.....	107
図版 24-1	ほ場整備が行われた地点	24-2	ほ場整備が行われた地点(草刈後)	.....	108
図版 25-1	第4調査地点北半(トレンチ17付近調査前)	.....	109		
	25-2	第4調査地点北半(トレンチ18付近調査前)	.....	109	
図版 26-1	トレンチ17検出状況	26-2	トレンチ17土層検出状況	.....	110
図版 27-1	トレンチ18横断溝検出状況1	27-2	トレンチ18横断溝検出状況2	.....	111
図版 28-1	番所(関所)跡	28-2	番所(関所)跡	.....	112
図版 29-1	第5調査地点北半(草刈後)	29-2	第5調査地点北半(草刈後)	.....	113
図版 30-1	第5調査地点南半(草刈後)	30-2	第5調査地点南半(草刈後)	.....	114
図版 31-1	祠 清正様	31-2	矢穴のある石	.....	115
図版 32-1	トレンチ20検出状況	32-2	トレンチ20土層検出状況	.....	116
図版 33-1	トレンチ21検出状況	33-2	トレンチ22検出状況	.....	117
図版 34-1	トレンチ23検出状況	34-2	トレンチ23土層検出状況	.....	118
図版 35-1	トレンチ22からトレンチ23を見る	.....	119		
	35-2	トレンチ24検出状況	.....	119	

図版	36-1	第6調査地点（全景）	36-2	二間茶屋跡	120
図版	37-1	旧国道の石垣（明治期）	37-2	旧国道沿いの石碑	121
図版	38-1	作業風景	38-2	発掘作業員のみなさん	122
図版	39-1	出土遺物（1~8）	39-2	出土遺物（9~16）	123
	39-3	出土遺物（16~24）	39-4	出土遺物（26~31）	123
図版	40	徳城幹付近鳥瞰			124
図版	41-1	トレンチ1付近調査前状況	41-2	トレンチ1上層堆積状況	125
図版	42-1	トレンチ2付近調査前状況	42-2	トレンチ2土層堆積状況	126
図版	43-1	トレンチ3付近調査前状況	43-2	トレンチ3完掘状況	127
図版	44-1	トレンチ4付近調査前状況	44-2	トレンチ4完掘状況	128
図版	45-1	トレンチ4土層堆積状況	45-2	トレンチ4西側石垣	129

# 第1章 総 括

## 第1節 津和野町の概要

遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第1図）する。平成17年9月25日に旧津和野町と旧日原町の合併が行われたため、現在では北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27km、南北19kmを測り、総面積高津307.09kmとなる。また、総面積の約8割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在し、まさに典型的な中山間地域である。

町内の代表的な山は標高1,263mの安蔵寺山は西中国山地国定公園に、標高907mの青野山は青野山県立自然公園に指定されている。また平成18年度の一級河川水質現況調査（国土交通省）で、他県の河川8つと共に第1位の水質を誇る清流高津川など、豊かな自然に恵まれている。

津和野町内には津和野城跡・森鷗外旧宅・西周旧宅の国指定史跡と旧堀氏庭園の国指定名勝のほか、国指定重要無形民俗文化財の鳶舞など多くの文化財があり、「山陰の小京都」と呼ばれ、全国的にも観光地として知られている。

津和野町の人口はで9,515人（平成17年国勢調査）であり、産業別就業者人口は、平成17年の国勢調査によると第1次産業就業者割合が10.4%で、第2次産業が23.1%、第3次産業が66%となっている。第1次産業の就業割合が減少し、代わって第3次産業の就業割合が増加していたが、人口の減少に伴い就業人数も減少傾向にある。

津和野町にはそれぞれの地域が育んできた豊かな自然と歴史や文化を継承し、そこで生活する人々が将来に亘って心の豊かさを実感でき、温もりの感じられるまちづくりを進めて行くことを基本理念に念頭におき、「人と自然に育まれ、温もりのある交流のまちづくり」を基本目標に、町政を行っている。



第1図 位置図

## 第2節 津和野町の歴史

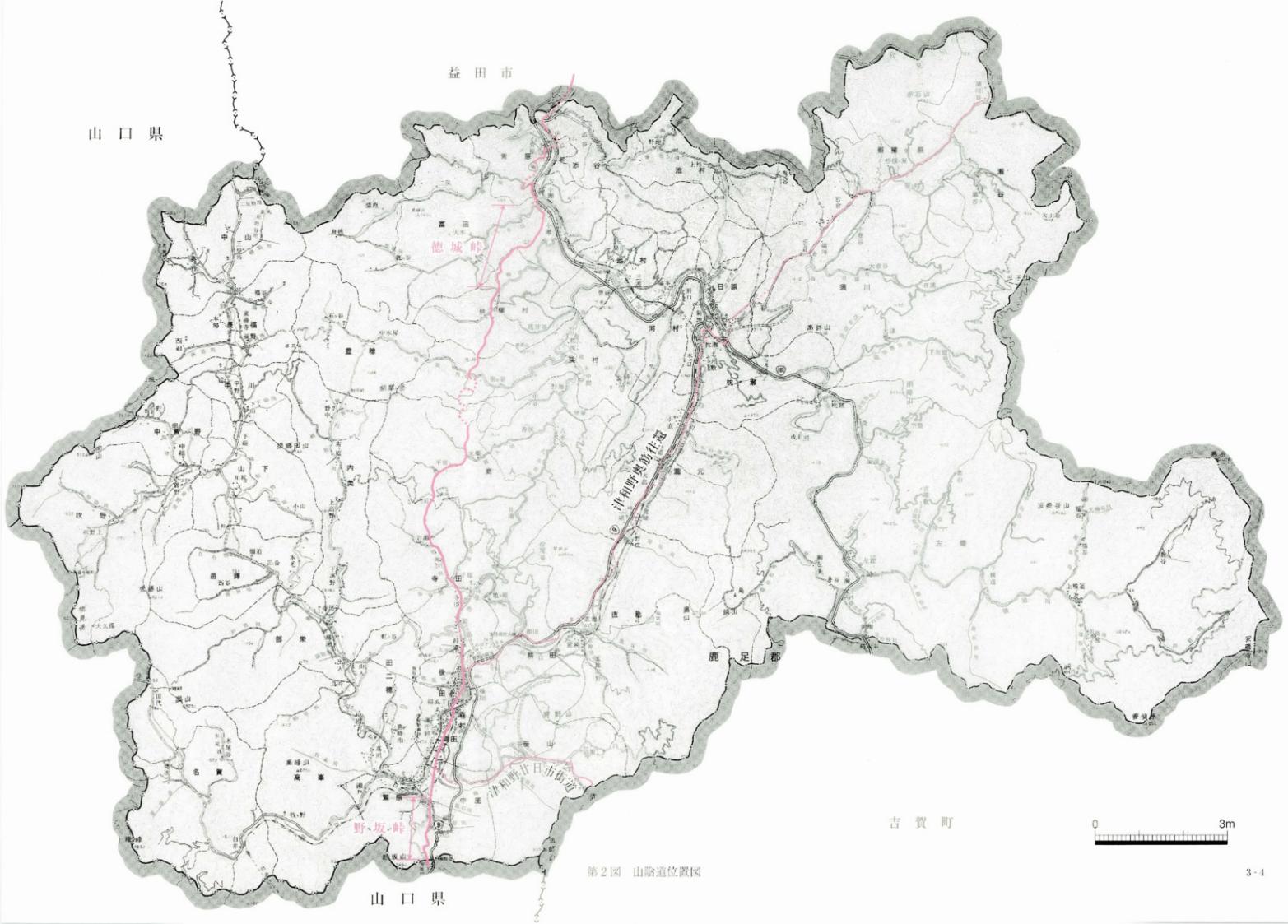
津和野町には、これまでに多くの遺跡等が確認され発掘調査等を実施している（第6・44図）。そして、いまのところ後期旧石器時代にまで遡る。旧石器は町内で唯一ナイフ形石器が喜時雨遺跡から出土している。高田遺跡や山崎遺跡からは縄文時代早期の押型文土器が出土し、柿木田遺跡などからは縄文時代前期の遺物が出土している。また高田遺跡からは縄文時代中期と後期中頃の土器も発見されており、大蔵遺跡からは後期後半の土器が、萬世溢遺跡からは晩期の土器や石器などが出土している。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落が高田遺跡で確認され、萬世溢遺跡・柿木田遺跡からも土器片や、打製石器などが発見されている。町内の古墳は、津和野町最上流の本部地区にある鎌治原古墳群と、三渡八幡宮の近くにある社地古墳群があるのみである。大蔵遺跡からは奈良・平安時代の集落跡であり、また高田遺跡からは同時期の綠釉陶器・皇朝十二銭の一つ承和承寶（836年初鑄）・大量の土師器・須恵器が発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷（元美濃郡鹿足郷）と呼ばれていた地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安5（1282）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の本部地区に入り、その後14世紀に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では12・13世紀の白磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明らかになりつつある。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同時に存在していたとするのが通説である。吉見氏は関が原の戦以後、毛利氏に伴って萩に移る。その後、坂崎氏による近世城郭化に伴って、城の大手口が西の喜時雨から東の現大手口に変更されたと言われている。発掘調査においても17世紀以降の遺物、遺構の検出が激減していることから、17世紀に入り喜時雨地区は津和野城大手口の武士団集落から急速に農村化したものと考えられる。これ以後津和野城を挟んで東側が城下町となり、坂崎氏が行った城下町の整備によって現在の基礎ができたのである。坂崎氏はわずか16年という短い治世であったが、その後因幡国より移封してきた亀井氏は11代225年もの間津和野藩を治めた。

亀井氏は製紙技術を広く領内に普及し、紙を藩の専売制とし、莫大な収入を得るなど藩財政の確立を行った。このため4万3千石の津和野藩は實質15万石の経済実力を持つと言われるほどであった。一方天明6年（1786）8代藩主矩賛が藩校養老館を創設し、人材の育成に努めるなど教育振興にも力を注ぎ、小藩ながら国学の福羽美静・洋学の西周・地質学の小藤文次郎・文豪森鷗外など日本に誇る人物を輩出した。

勤皇の志厚く、王政復古を唱和していた11代藩主茲監は慶応2年（1866）第2回目の防長征討が發せられた時、幕府の命に従うか、長州藩に味方するか重大な岐路に立たされた。その舞台になるのが、山陰道野坂峠である。この時、茲監の判断によって城下町は戦火を免れ、多くの文化財を現在まで残すことができたのである。

明治維新後の津和野藩は明治4年（1872）に浜田県に編入となった。しかし、銀山や鋼山を有し天領であった旧日原町の日原地区は明治2年（1870）に大森県に編入していた。明治3年に大森県が浜田県になり、のちに津和野藩が浜田県に入ったことで現在の津和野町は全て浜田県になったのである。



第2図 山陰道位置図

昭和に入ると、旧津和野町では昭和29年（1954）木部村・畠追村・小川村が津和野町と合併し、旧津和野町となった。そして、旧日原町では昭和10年（1935）に須川村が日原村と合併し、昭和21年（1946）に町制を施行した日原村は日原町となった。昭和29年（1954）には青原村が日原町と合併し、旧日原町となったのである。そして平成17年（2005）に旧津和野町と旧日原町が合併し、津和野町として発足することになり、現在に至っている。

### 第3節 津和野町内における山陰道の概要

山陰道は、律令によって定められたわが国古代の行政区画を意味するとともに、そこを貫く官道のこととも意味した。官道山陰道は、京（藤原京・平城京・平安京）を発し、丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見を貫くものであった。官道は現在の下関市内まで通っていたはずだが、現在の島根県浜田市より先は文献上でたどることができない。推定ではあるが、当初津和野町は通過しなかったようである。

中世に入り津和野に吉見氏が城を築き、周防山口に大内氏が據るようになると、石見益田からそれらの地に向かうのが山陰道と考えられるようになった。そのため、津和野を通過するようになったが、現在とは異なり、島根県益田市美濃地町から畠迫地区に入り、中世の城下町を通過し、野坂峠を越えて長門・周防へと続く。

近世に入ると、中世の道とは異なるルートを迎るようになった。町内では、青原・柳・宿谷・商人・千原・寺田・後田・森村・町田・中座を通って、野坂峠から長州藩に入る（第2図）。このルートは天領である日原・畠迫を避けるため、青原から千原までの間に徳城峠・鬼ヶ峠・櫻実峠などの険しい難所を越えなければならなかった。津和野郷土館が所蔵する「正保国絵図」（第3図）には太い線で描かれ、一里塚も整備されていることがわかる。

### 第4節 調査に至る経緯と経過

津和野土木事務所より県道柿木・津和野停車場線の整備区間においての埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての照会が津和野町教育委員会になされた。これに対して教育委員会では、平成14年3月において試掘調査を実施し、その結果、江戸期の石畳・石敷き・石垣や側溝などが確認された。

そして、工事を着工するため遺跡の取扱いについて協議があり、平成17年3月、町文化財保護審議会は盛土による現地保存と記録保存をするという決定を下した。その後、記録保存の発掘調査をするため、平成18年7月18日付で、島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、発掘調査を同年9月28日から実施した。調査中には、平成18年11月10日に文化庁記念物課の山下調査官、島根県教育委員会文化財課丹羽野氏が来町され今後の調査等の進め方についての指導を受けた。また、平成19年3月13日、島根県教育委員会文化財課丹羽野氏、島根県の歴史の道を調査された池橋達雄氏、村上進氏、町文化財保護審議会会長の松島弘氏らに、発掘調査成果を踏まえて山陰道の道としての評価をしてもらった。そして、同年3月23日、現地での発掘調査は無事終了した。

さらに、同年5月23日文化庁記念物課の木中主任調査官が来町され、当時の街道が良好な状態で残っており、工事区間だけの調査ではなく県境までを追加調査しこの街道の全体を調べて評価すべきであるとの指導を受けた。

そして、同年7月20日付で、島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、同年8月1日から追加の発掘調査を実施した。

平成19年8月29日、追加調査がほぼ終了したところで、文化庁記念物課山下調査官に来町してもらい現地での調査成果を説明し、今後の取扱い等についての指導を受けた。その時点で野坂峠についての調査は充分であるとの指導であったが、町内に残る山陰道についても追加調査する必要があるとの指導を受けた。そのため、町内において現存状況が良い徳城峠について調査することを決定し、同年9月7日付で島根県教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、同年9月12日から徳城峠の発掘調査を実施した。そして平成20年3月11日、無事現地での発掘調査は終了した。



野坂の左余白部分「石見之内州境鳴津屋より中通長州境迄三拾五里、津和野より此壹里山迄壹里、  
但此壹里山ヲ長州領よりも用、徳佐村壹里山迄壹里。」

右部分「津和野城下より此壹里山迄壹里。大道。」

参考：『津和野町史 第三卷』

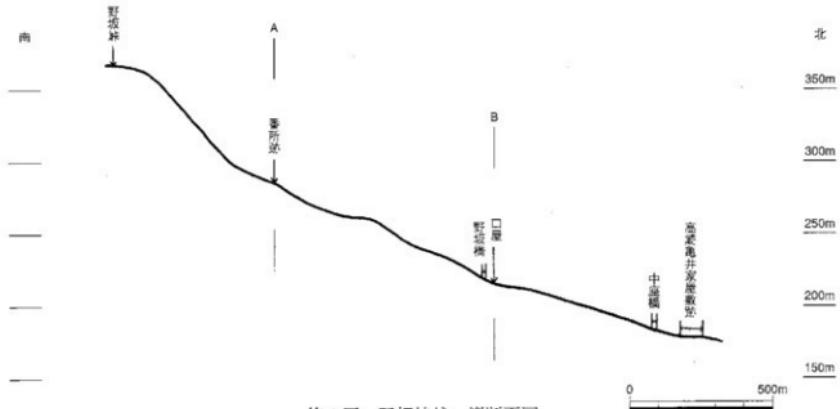
第3図 「正保国絵図」より抜粋 津和野郷土館蔵

## 第2章 野坂峠越

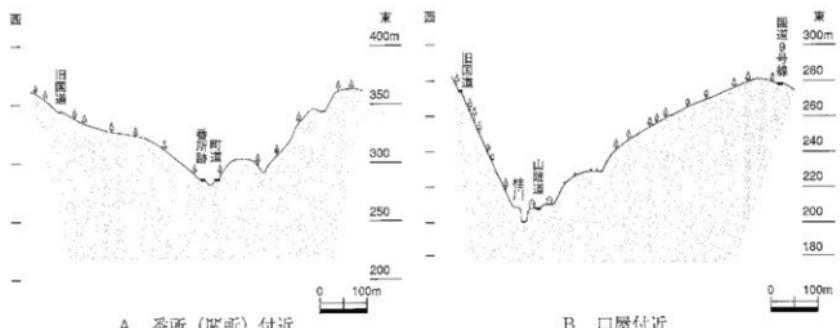
### 第1節 地理的環境と歴史的環境

#### 第1項 地理的環境

山陰道（野坂峠越）は、島根県津和野町中座地内に所在し、本町最南端部の峠であり山口県との県境に位置する（第2図）。調査区北側は、津和野城下町の入り口にある口屋跡があり標高242.4mで、ちなみに城下町の中心地である殿町付近の標高は156.9mになる。口屋跡（第4・5図）から桂川を渡ると緩やかな上り坂になり、約200m進んだところから急な上り坂（勾配約8.6%）が約150m続く。なお、桂川は街道の東側を流れ、西側は標高420mの陶ヶ嶽（陶晴賢本陣跡）がある。そこから先は緩やかな上り坂となり番所跡（第4・5図）などが確認された所であり、標高は284.44mである。番所を過ぎると急な上り坂（勾配約20%）が続き県境である峠に至る。県境の標高は361.45mである（第4図）。



第4図 野坂峠越 縦断面図



第5図 野坂峠越 横断面図

## 第2項 歴史的環境

本地区的調査付近における史跡等は、津和野川両側において多く点在している（第6図）。津和野川付近は高田盆地であり、高田遺跡や山崎遺跡など縄文時代早期の古い遺跡が確認されており、それ以降の古代遺跡も多く点在する地区である。なお、山陰道が整備された中世以降においても、津和野城をはじめとした山城や城下町などが当時の面影を残したままで現存する。

このような歴史的遺跡が集中する地区において、山陰道は城下町を南北に貫く形で街道が設けられている。そして、本街道から東側（広島県）へ向かう廿日市街道があり、この街道は参勤交代に使用された街道である。また、城下町の北側から北東（浜田市）へ向かう奥筋往還道が確認することができ、これらも山陰道と同様に津和野藩として重要な街道であった。

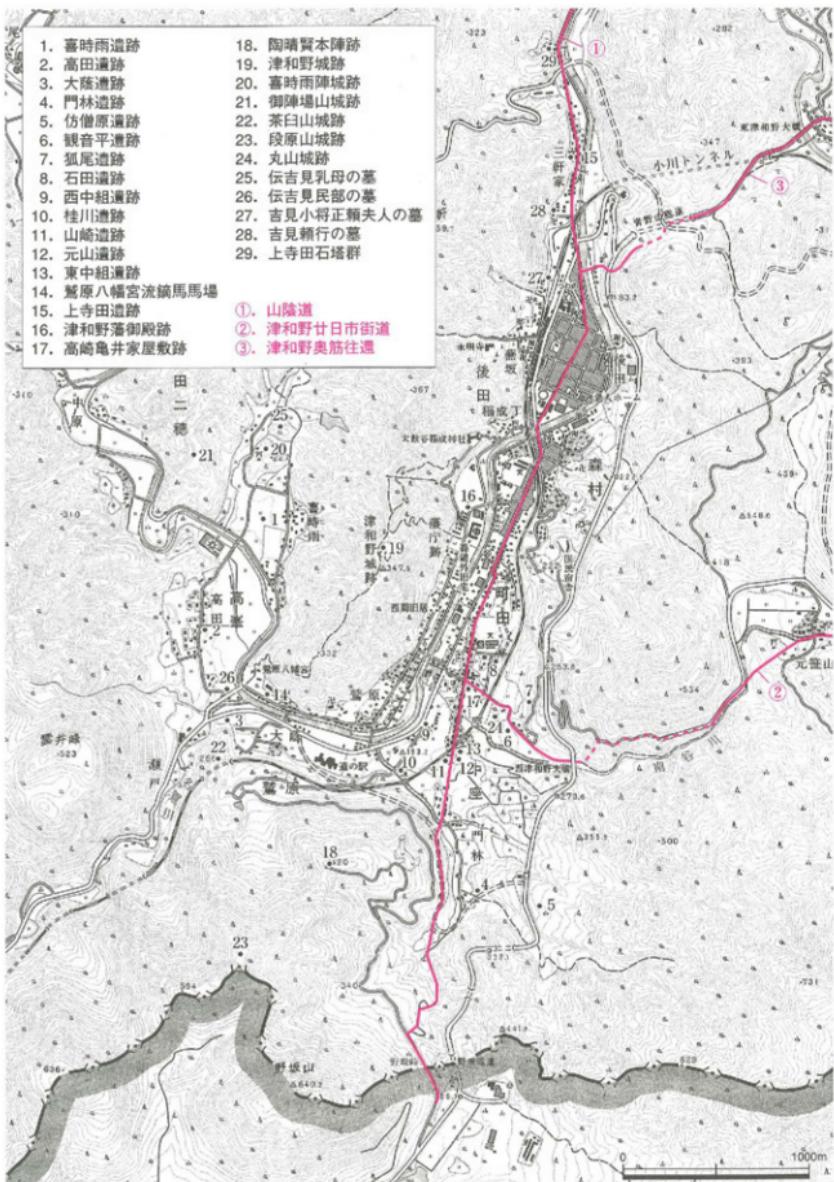
本地区的山陰道は、特に江戸時代において長州藩との国境であり城下町の入り口にあたる重要な時であったことは確かである。この辺には番所（関所）が設けられており、国境を挟んで両側の約500m付近にお互い設置していたようである。このことは、長州藩にも番所跡が確認されており、津和野藩側も今回の調査で確認された。また、番所の警護の任には足輕が配置されていた。

津和野藩の西南は外様雄藩の長州藩、北は親藩の浜田藩に挟まれた小藩であった。特に元治元年（1864）の第一次長州征伐、慶応二年（1866）の第二次長州征伐のおりには、一方に付和雷同して従えば城下が戦火に包まれる危機にさらされていた。それを乗り切ることができた大きな要因として、藩主のリーダーシップと藩の情報収集能力が卓越していたことがあげられる。情報収集能力の高さは木戸孝允（桂小五郎）の伝記にも記されており、11代藩主龜井茲監によって全国からの情報を長州藩の毛利侯に見せることがあったようである。津和野藩は長州藩に勝るとも劣らない情報収集能力と、内容の精度の高さと速さをもち、それらを藩主の勅命を受けた藩校養老館教官や、出身者を含めた藩士達の英知を結集し、藩の危機を救ったのである。

その頃に書かれた文書には山陰道や、野坂という言葉が書かれているものが、いくつか確認されており、その中には茲監が第二次長州征伐の際「とくに浜田・雲州（松江）・因州（鳥取）の各藩は山陰道における津和野藩の近藩であるため、情報収集と外交を怠らないように」と、藩士に与えた心得書も残っている。

第二次長州征伐では、徳川幕府方につくことを命じられた津和野藩と、積年の隣交があった長州藩の関係は緊迫したものとなったが、それに慌てることなく、長州藩との友好を改めて確認するなど、津和野藩はあくまで中立の立場を取ろうと奔走した。しかし、津和野藩領に幕府の軍目付が入領し、長州軍も野坂口の関門に着陣したため、対処を誤れば野坂峠上に設置していた大砲等の一撃で津和野城下は焦土と化す危機に立たされた。

そして、この辺の国境において長州藩と軍目付引き渡しについての談判が行われたのである。かなり難航した話し合いであったが、これまでの経緯と津和野藩の苦衷を告げ、軍目付に危害を加えないという約束を条件に、ようやく長州藩の了解を取り付け、野坂峠で軍目付を無事引き渡し、事なきを得たのである。



第6図 野坂峠越周辺の遺跡分布地図

## 第2節 調査方法と調査区の設定

### 第1項 調査方法

今回の調査の対象は街道であるため、その全貌をまず地図上で確認することから始めた。なお、山陰道の調査は島根県教育委員会が平成8年度に「島根県歴史の道調査」として実施しており、野坂峠についても『歴史の道調査報告書 山陰道Ⅲ』において調査報告がされているため、今回の調査の基本資料として使用した。

まず調査範囲の北側1/3は、県道整備事業に当たるため街道の確認は容易であったが、それより南側については、草木が茂っており確認することが困難なため、草刈りをしながら街道を確認する作業を最初に実施した。

そして、街道の全体が把握できたが調査を実施するには長い調査範囲のため、調査地点を6つに区画して各調査地点において数ヶ所のトレンチを設定（トレンチの大きさはその都度決定した。）して発掘調査を行った。なお、北側の県道整備事業に伴う調査地点は、全面発掘調査を実施している。

また、街道に関する絵図や古文書等の調査も並行して行った。しかし、これらの文献資料が殆ど現存せず、数枚の絵図と幕末期の長州藩との譲り取りの文書が残っている程度であり、思った以上の調査成果を上げるまでには至らなかった。

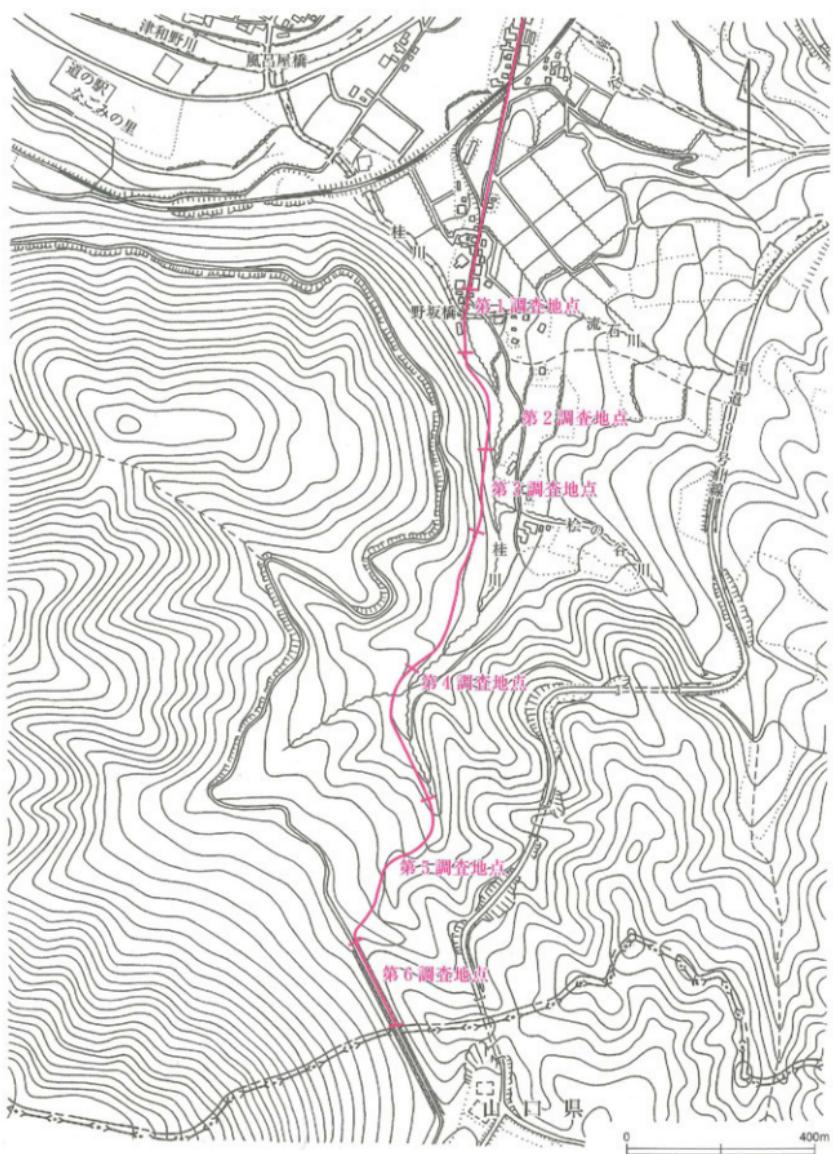
### 第2項 調査区の設定

調査区全体が約1.5kmにおよぶため、まず北側から第1調査地点とし両端地点を第6調査地点として調査地点を6地区設定した（第7図）。

まず第1調査区は、城下町の入り口にあたる口屋付近である。第2調査地点は、県道整備に伴った部分の北側半分に当たる所であり、全面発掘調査を実施し石敷きが良好に保存されていたことが確認できた調査区である。第3調査地点は、県道整備にかかる南側半分の地区であり、その中で6箇所のトレンチを設けた。

第4調査地点以降の調査については、山陰道（野坂峠越）の全貌を明らかにするために追加で調査を実施したところである。まず第4調査地点は、当時の街道の番所があったのではないかと言われている地区である。番所付近を中心に3箇所のトレンチを設定し、調査状況に合わせてトレンチの大きさを増減して行った。第5調査地点は、番所跡付近から旧国道との合流までの坂道となる地区である。5箇所のトレンチを設定し発掘調査を実施した。

最後に第6調査地点は、旧国道から県境までの地区である。この調査区は現在、町道として整備されていることからアスファルト舗装であり、発掘調査等をすることはできなかった。しかし、この道は明治19年に整備されており、その当時の石垣がそのまま現存していることから、本地点は石垣等の測量を行い図化することとした。



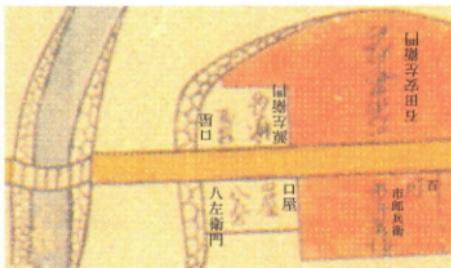
第7図 野坂峠越 調査区位置図

### 第3節 調査の概要

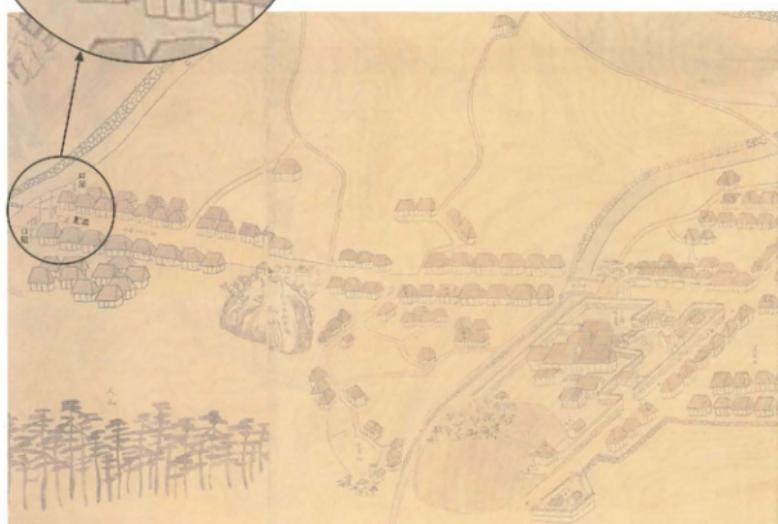
#### 第1項 第1調査地点（第10図）

本調査地点は、調査区の北側であり津和野城下町の入り口にあたる（第8・9図）。街道の両側に口屋といわれる施設があったことが絵図から確認することができる。現在は西側に民家があり東側は畠になっており、当時の面影は少ないが、街道の東側には当時の石垣や井戸が確認することができる。

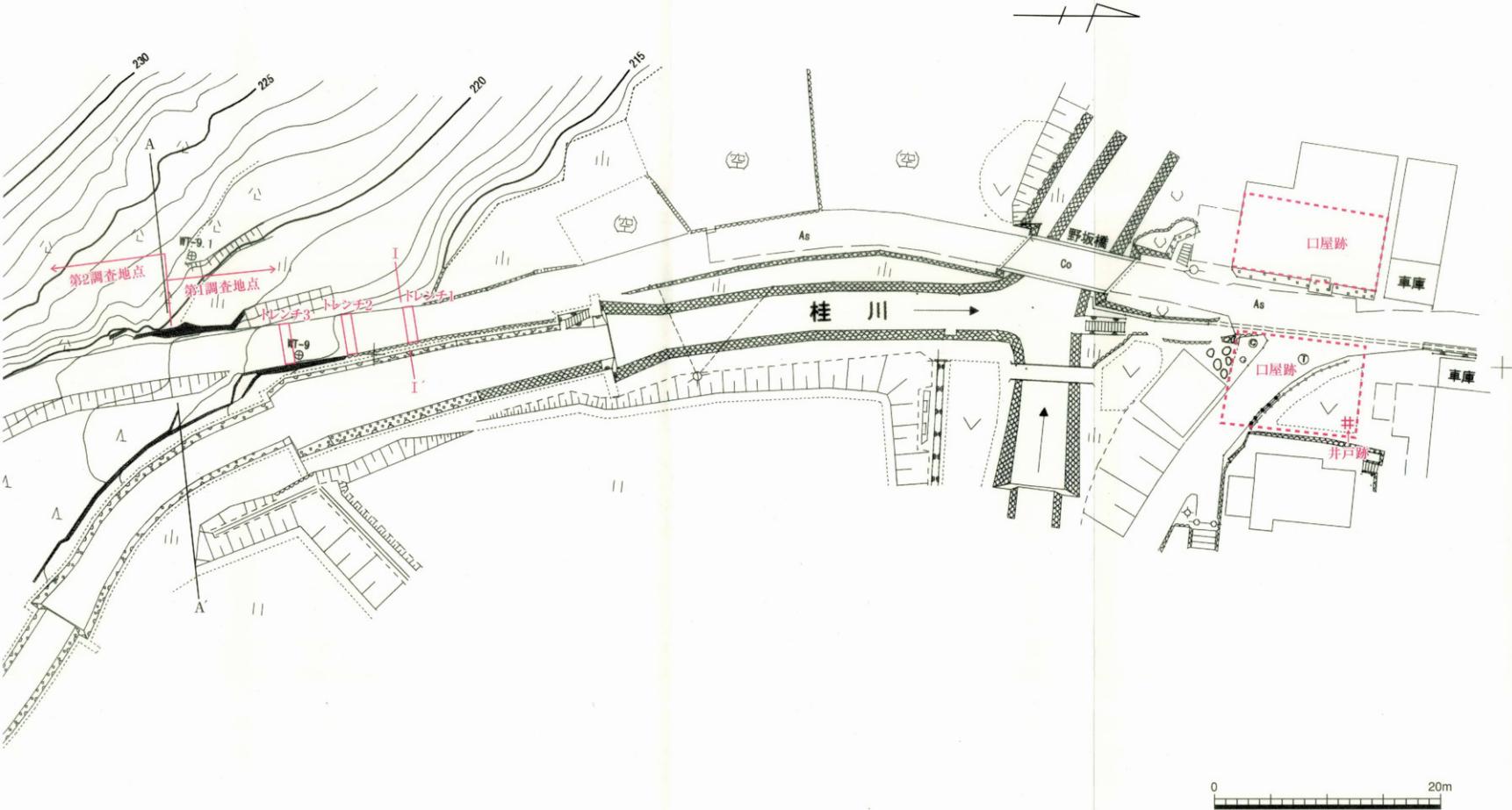
町史によると、野坂峠のある中座地区は城下町が形成されたときは純農村であった。しかし、寛永2年（1662）この地にはじめて屋敷が出来たのと同時に、野坂峠のためにここに口屋番所が設けられたとある。また、元禄期の津和野城下侍屋敷明細絵図には、街道を挟んで東西の口屋に八左衛門・源左衛門の名があることが確認でき、西側の口屋の傍らには石田安左衛門という口屋番所と関係のある役人らしき人物の名前が書かれている。



第8図 元禄期 津和野城下侍屋敷明細絵図



第9図 津和野城下町絵図（栗本格斎筆）より抜粋



第10図 野坂峠越 第1調査地点路面実測図

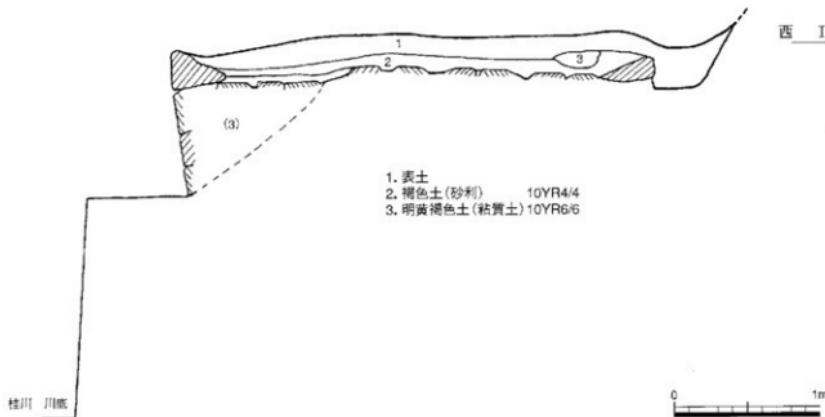
そして、野坂橋を渡り県道整備に伴う発掘調査を実施した地点までを第1調査地点とした。その内、半分以上がアスファルト舗装されているため、南側の舗装されていない場所に3ヶ所のトレントを設定して発掘調査を行った。その結果については以下で述べることにする。ただし、トレント2、3についてはトレント1とあまり離れていないため、堆積状況などがほぼ同様であったので別記しないことにした。

### 1. トレント1（第10・11図・図版3）

本トレント付近は、昭和に入って整備された砂利を敷いた層である（第2層）。おそらく現代においても車がこの付近まで通ることが可能なため、幾度となく整備されてきた所ではないかと考えられた。

しかし、第3層からは江戸時代に整備された部分であると考えられた。約30cm～50cm大の石を敷いて路面を整備したと同時に地盤を強化したと想定される。道幅は約3mを測り、西側（山側）には幅30cm、深さ30cmの側溝が地山を削って整備されている。さらに北側の舗装されている部分についても、おそらく石敷きがされているのではないかと思われた。

また、街道のはば中央付近から東側へは盛土されており、その下を流れる桂川に土が流れないよう上留めのための石垣が築かれている。その石垣の高さは南端が約1mで北端に向かって低くなり約28m付近では無くなっている。そして現代は、昭和期に護岸整備を行ったためコンクリートが築かれている。



第11図 野坂峠越 トレント1 土層堆積図

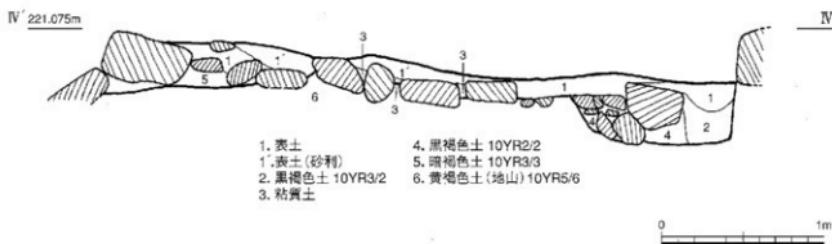
## 第2項 第2調査地点

本調査地点は、県道赤木・津和野停車場線の整備予定区間の北側約半分で全長約200mである。第2調査地点に向かって緩やかな上り勾配となり、比較的勾配のない調査区間である（約8%）。本調査地点においては、全面発掘調査を実施しており路盤強化のための石敷きや側溝が確認された。さらに、7つのトレーニングを設定して、石敷きの下層の確認をする目的とし発掘調査を実施しているので、以下順番に述べることにする。

### 1. トレーニング4（第12・14図・図版10）

本トレーニング付近は、表土の土層を除去すると、河原石や角閃石安山岩などで道路の中央部を中心に幅約2mに敷き詰められた状態で検出され、西側には幅約35cm深さ約40cmの側溝が確認された。これらの敷き詰められた石を外すと地山層になる。地山は粘土質で水捌けも悪いので、その上に石を敷いて水捌けや補強のための石敷きだと考えられた。また、側溝は地山を削って溝状にしている。

ここでは、山の斜面を「L」字状に切り取り、その切り取った水平面に30cm～50cm大の石を敷いて路面を整備したと同時に地盤を強化し、その上に粘土質の土（第3層）を敷いて路面に仕上げたと考えられた。そして石の配列状況などから推測すると、当時は石が殆ど隠れていたのではないかと思われた。山際には、路面の流失等を防ぐための側溝が整備されている。また、当時からなのか判らないが、僅かに山際に向かって傾斜しており低くなっている。道幅は約3mを測る。



第12図 野坂越 トレーニング4 土層堆積図

### 2. トレーニング5（第15図・図版11）

トレーニング1とはほぼ同様な構造で街道が整備されている。山の斜面を「L」字状に切り取り、その切り取った地山上に30cm～50cm大の石を敷いて地盤を強化し、その上に粘土質の土を敷いて路面としている。しかし、第4トレーニングより敷石が整頓されている感じもあり、本トレーニング周辺は敷石の表面が一部露出した状態であった可能性が高いと判断した。

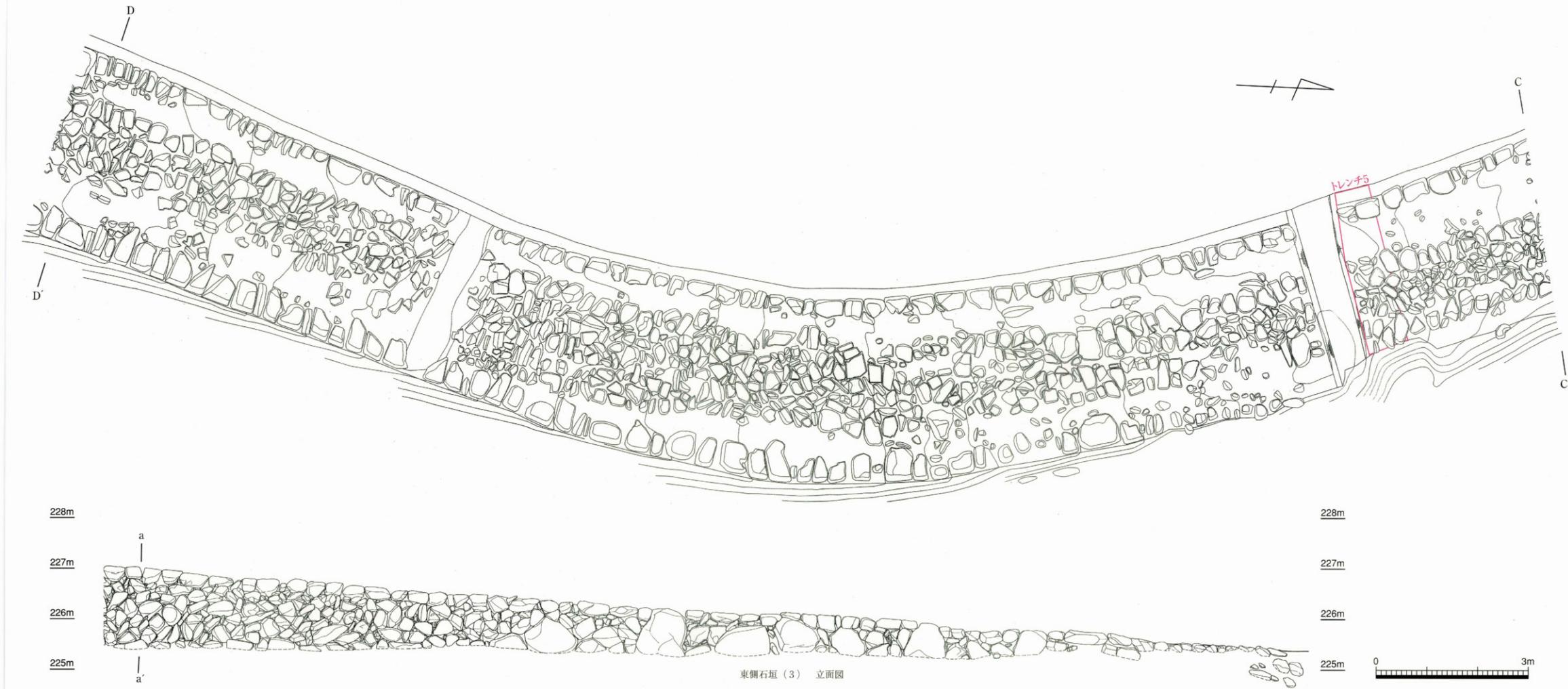
石疊状は幅約2mほどで、全体の道幅はトレーニング1同様に約3mを測り、側溝は幅40cm深さ40cmを測る。



第13図 野坂峠越 第2調査地点路面実測図（1）



第14図 野坂峠越 第2調査地点路面実測図（2）



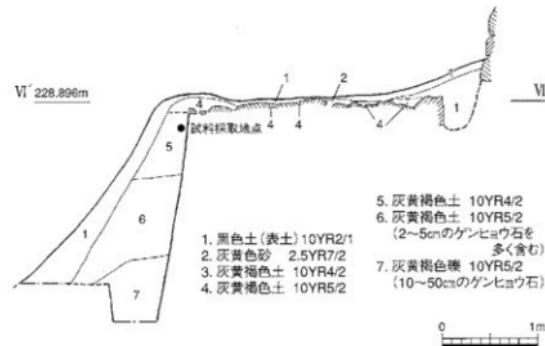
第15図 野坂峠越 第2調査地点路面実測図（3）

### 3. トレンチ6（第16・19図・図版12）

本トレンチは、トレンチ4、5とは大きく異なり、盛土によって道が構築されていることが確認された。おそらく本トレンチ周辺は谷部になるため盛土によって街道を整備したと考えられる。

5・6層が盛土部分であり、その上面に石を敷いて路面の水はけや強化をするために行ったと考えられる。また、トレンチ5から盛土の流出を防ぐため谷川側を石垣によって補強されていた。道幅は約3m、側溝は幅約30cm、深さ約30cmを測る。

さらに、石敷きの造成年代を明らかにするために本トレンチ内から検出された炭片の分析を依頼した。その結果は本項の7で詳細を述べることにする。

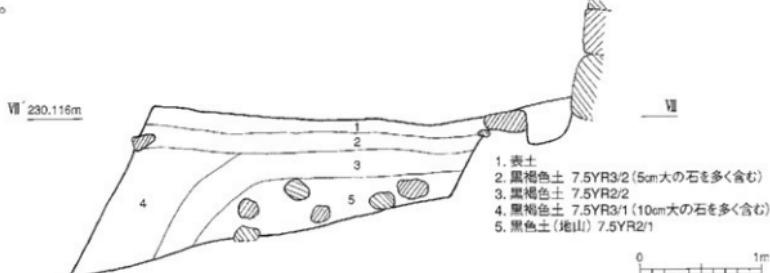


第16図 野坂峠越 トレンチ6 土層堆積図

### 4. トレンチ7（第17・19図・図版13）

本トレンチもトレンチ6と同様に盛土工法である。土層堆積状況から判断すると、第3層の盛土によって初期の街道が整備されたのではないかと考えられ、道幅は約2mであったと想像する。その後、第4層を盛土して道幅を広げた最終的な街道整備を行ったのではないかと考えた。そして第2層面の小石を多く含んだ層で固められた街道の路面に仕上げたと思われる。道幅は約3mを測り、側溝は幅約35cm、深さ約35cmを測る。

さらに、川側の部分は石垣を築いて盛土が崩れないように整備している。また、山側においても石垣が築かれているが、本トレンチ周辺については構築年代が同時期である可能性は低いと考えられる（第19・20・21図 西側石垣立面図）。その理由として、道側の側溝石より山側の石垣の一一番低い石が一段高い所から積まれていることから、おそらく側溝が埋まった後に築かれたものと判断できるためであった。



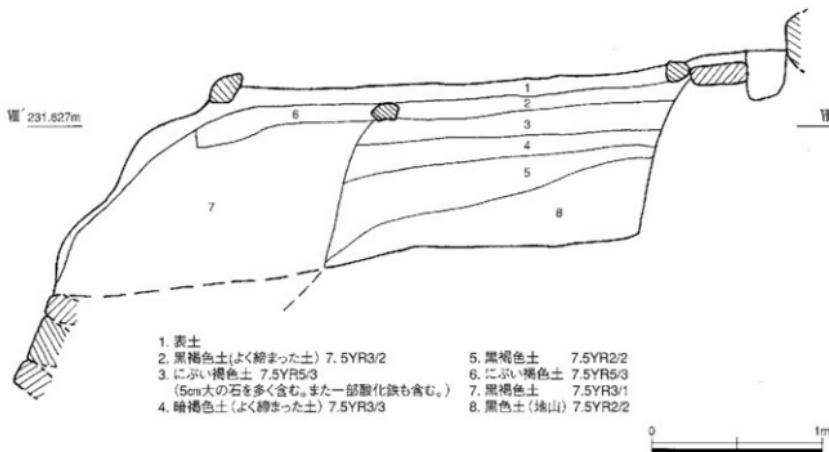
第17図 野坂峠越 トレンチ7 上層堆積図

## 5. トレンチ8（第18・21図・図版14）

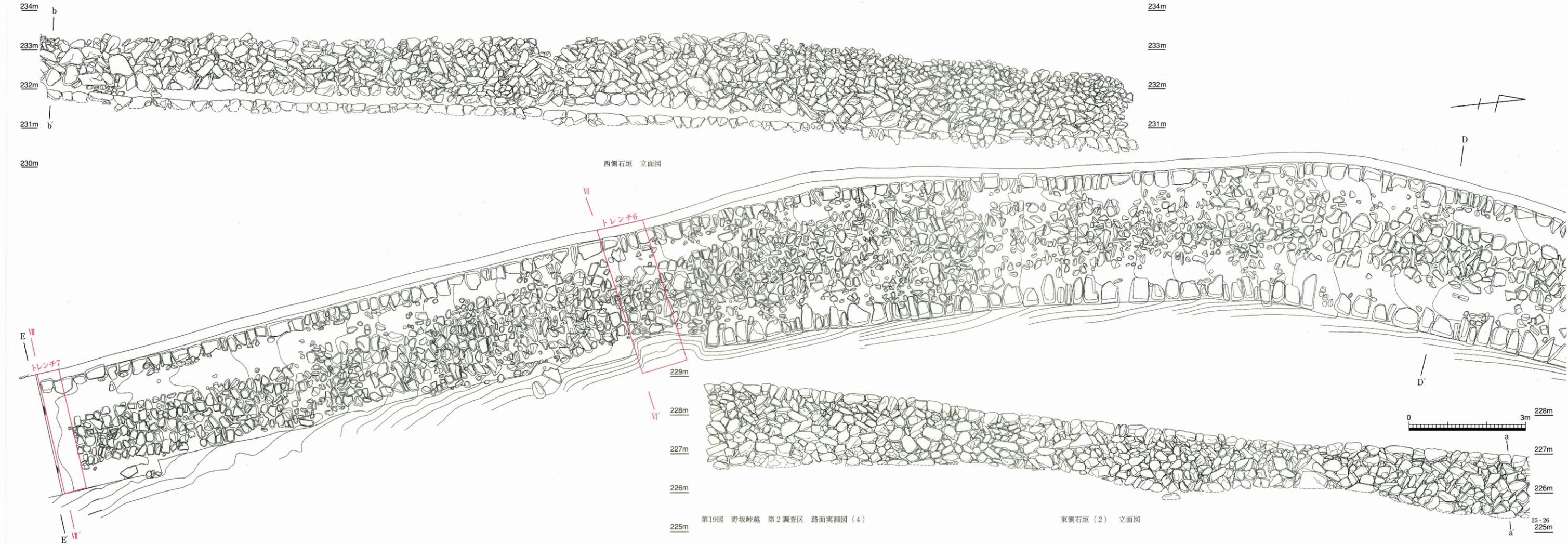
本トレンチもトレンチ6、7同様に盛土によって整備されておいる。その理由についても、おそらく谷部であるため、その前後の街道とレベルを合わせるために盛土する方法を選択したと考えられた。

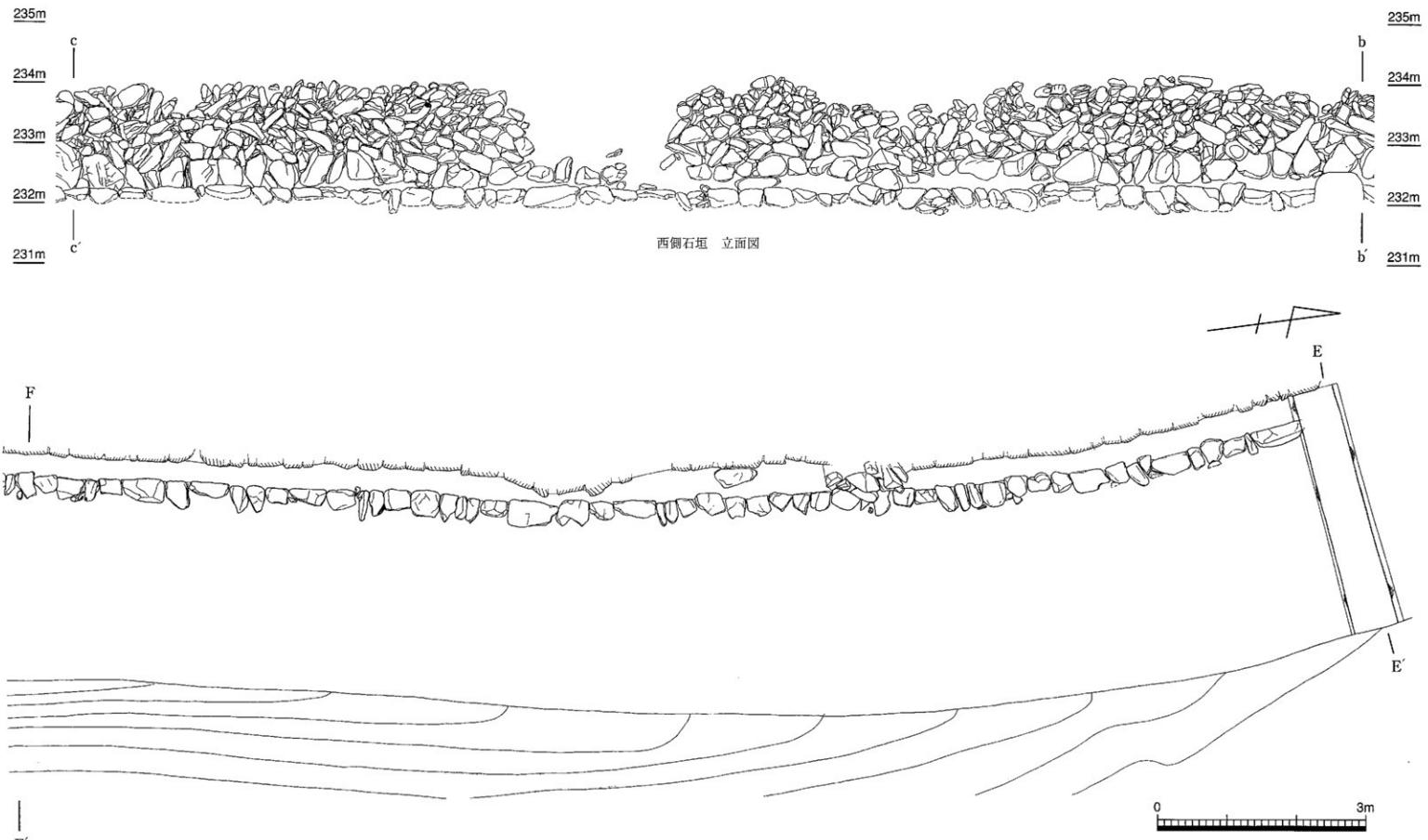
そして、第3～5層の盛土によって最初の街道の整備した状態が堆積層から判断でき、固められた第3層の小石を含んだ鈍い褐色土が路面であると思われる。このことは、トレンチ7でも確認されており、道幅も約2mを測りトレンチ6のもの同等の道であると考えられ、現在の街道以前に整備されていた可能性が高い。

その後、第7層の盛土によって道幅を拡幅して、第6層の鈍い褐色土、おそらく第3層と同じ性質の土で路面の整備を行ったと考えられた。第3層と第6層の段差は、おそらく時代の差であると考えられる。つまり、第3層が路面として使用され、時代が経つごとに腐葉土が堆積されて第2層となり、その時点で拡幅工事が行われたのではないかと思われた。そのために堆積層ではズレが生じた。最終的な街道路面は第2・6層であり、道幅は約3mを測り、側溝は幅約25cm、深さ約30cmを測る。



第18図 野坂峠越 第8トレンチ土層堆積図





第20図 野坂峠越 第2調査区 路面実測図（5）

236m

235m

234m

233m

236m

235m

234m

233m

西側石垣 立面図

トレンチ9

G

トレンチ8

V

F

c

c'

232m

232m

G'

F'

第21図 野坂峠越 第2調査区 路面実測図（6）

東側石垣（3） 立面図

0

3m

29 - 30

## 6. 出土遺物（第22・23図・図版39）

### \*トレレンチ3から4まで

1は、磁器の小碗で端反り形である。内側には一重の線文様を施し、底内部には「力」と記されており、文化年間（1804～1818）に作られたと思われる。2は、小片のため器種は不明だが体部の片で18世紀のものと思われる。3は、磁器の皿で18世紀頃に作られた可能性が高い。また内・外側共に施釉されていたと思われるが、表面が擦れていますから造構に伴うものと考えられる。4は、小碗蓋で18～19世紀のものと考えられる。5は、磁器で器種は不明だが19世紀のものである。また外側の釉薬が擦れていますが確認できる。6は、磁器の碗で端反り形である。内側には三重の線文様があり、外側には植物文様がある。7は、外側に蜻唐草文の施された瓶子形の神酒徳利である。6・7は、幕末から明治時代頃の製作と思われる。

### \*トレレンチ4から5まで

8は、器種は不明だが高台から体部の片で19世紀初めのものと思われる。9は、高台部の片のみであるため器種は不明である。10は、陶器で内側に一条の沈線が確認できる。9・10は、江戸時代のものと思われる。11は、体部の片だが小片のため器種は不明。12は、サビ絵の施された石見焼である。11・12ともに幕末から明治時代のものと思われる。13は、器種は不明であるが、島根県益田市の喜阿弥焼である。3・5と同じく釉薬が擦れており山陰道に伴うものと考えられる。14は、平形の中碗であり大正時代以降のものであると思われる。15は、寛永通宝である。

### \*トレレンチ7から8まで

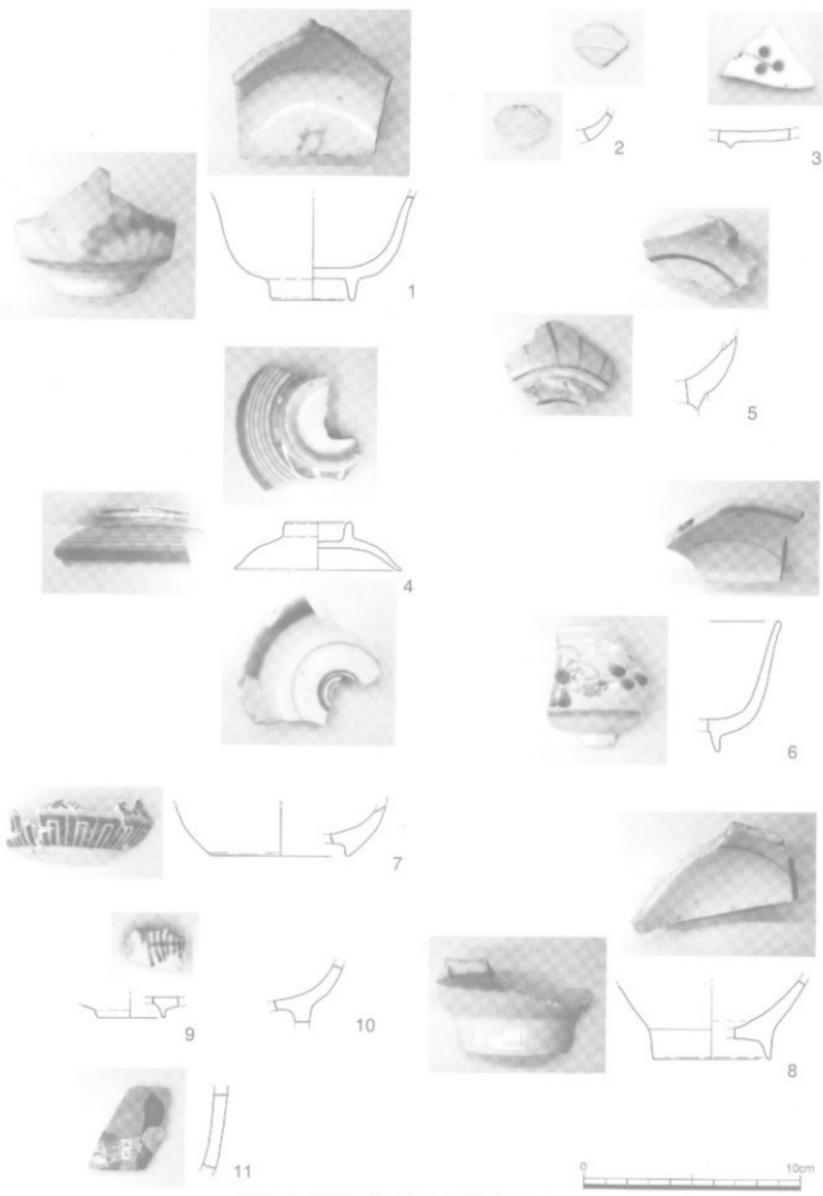
16は、体部の片であるため、器種は不明であるが、幕末のものと思われる。

### \*トレレンチ7から9まで

17は、磁器の仏飯器で台底が抉れている。台底は全て遺存している。江戸時代のものと思われる。

### \*トレレンチ8から9まで

18は、磁器の極小皿で体部から口縁部の片が残っている。外側には蜻唐草文が施され幕末のものと考えられる。19は、釉薬の色が緑灰色で出雲の布志名焼と思われる。20は、高台から体部の片が残る白磁器である。19・20は、共に幕末から明治時代のものと思われる。21は、磁器の重ね重の蓋で22と一個体であると思われる。22は、21と一個体の高台蘆重ねで、21・22は、明治時代のものである。20は、磁器の碗と思われる白上焼で、外側には植物文様が施されている。制作時期は明治4年以降と思われる。23は、陶器の酒杯である。全体の2分の1が遺存しており、高台部が人面のため額・鼻・顎の凸部分が擦れていますが確認できた。24は、捏鉢で全体の3分の2が遺存している。



第22図 野坂峠越 遺物実測遺物（1）

測定番号	出土地点	層	測定	種類	状況	測定(cm) 口径×底径×高さ			形態・手柄の特徴	色調	出土後成	備考
						口径	底径	高さ				
1	トレンチ3からトレンチ4まで	1層	横	小被	縦器	3.6			盤反射。塗付。 (内) 1箇の腹文様、底に「力」。	文様: 青灰色 底: 青灰色	良好	高台~体部の片文化(1804~1816) 沢
2	トレンチ3からトレンチ4まで	2層	横		縦器				塗付。	文様: (内) 青灰色 (外) 明青灰色	良好	体部の片江戸時代 18c
3	トレンチ3からトレンチ4まで	2層	直?		縦器				内外ともに細かい擦れ跡がある。	文様: 青色	良好	高台~体部の片江戸時代 18c?
4	トレンチ3からトレンチ4まで	側面	横	小被	縦器	7.6	2.05	2.20	拵付。(内) 4箇の腹文様。 (外) 7箇の腹文様、太い縁。	文様: 青色	良好	高台~口縁部の片江戸時代 18c~19c初
5	トレンチ3からトレンチ4まで	2層			縦器				条付。 (外) 脱漆が剥げている。	文様: 青灰色	良好	体部の片江戸時代 19c
6	トレンチ3からトレンチ4まで	2層	横		縦器			5.9	盤反射。塗付。 (内) 3箇の腹文様、(外) 横絞文様。	文様: 青灰色	良好	高台~に縦部の片幕式~明治時代
7	トレンチ3からトレンチ4まで	2層	直	神酒 便利	縦器	6.4			底子形。塗付。 (外) 斜底。	文様: 藍色	良好	高台~体部の片幕式~明治時代

8	トレンチ5からトレンチ6まで	2層			縦器	5.4			拵付。 (内) 1箇の腹文様。	文様: 青灰色	良好	高台~体部の片江戸時代 19c初
9	トレンチ5からトレンチ6まで	1層			縦器	3.2			拵付。	文様: 濃い青色	良好	高台部の片江戸時代
10	トレンチ5からトレンチ6まで	2層			縦器				(内) 斜底(一條)あり。	縫: 灰色 縫: 原オーリーブ色	良好	高台~体部の片江戸時代
11	トレンチ5からトレンチ6まで	2層			縦器					縫: 灰色 縫: 灰白色	良好	体部の片幕式~明治時代
12	トレンチ5からトレンチ6まで	1~2層			縦器				石丸縫。サビ跡。	縫: にびい青色 縫: 灰~オーリーブ色	良好	体部の片幕式~明治時代
13	トレンチ5からトレンチ6まで	—			縦器	4.6			吉岡弥透。 (外) 脱漆が剥げている。	縫: 暗灰色 縫: 黒色	良好	高台~体部の片幕式~明治時代~
14	トレンチ5からトレンチ6まで	1層	横	中棒	縦器	11.0	4	5.5	平底。	縫: 深緑色	良好	一筋欠損。 大正時代~
15	トレンチ5からトレンチ6まで	—	古鉢						實水通宣		良好	

16	トレンチ7からトレンチ8まで	1層			縦器						良好	体部の片幕式
17	トレンチ7からトレンチ8まで	1層	横	仮 脱漆	縦器	6.2	4.8	5.7	台面抹り込み形。	縫: 藍色	良好	五郎~口縁部の片幕式は全て薄茶 江戸時代

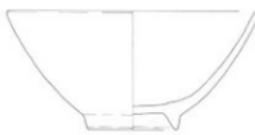
18	トレンチ8からトレンチ9まで	—	曲		縦器	8.6			平彫?	文様: 青色	良好	体部~口縁部の片幕式
19	トレンチ8からトレンチ9まで	—		鈍小瓦	縦器				出資・布志名模。	縫: 反白色 縫: 橙色	良好	体部の片幕式~明治時代
20	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢?		縦器	3.8			白銀。		良好	高台~体部の片幕式~明治時代
21	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢	重ね重	縦器	11			直ち裏の蓋。塗付。 9の底に墨わざある。	文様: 青色	良好	体部~口縁部の片幕式時代
22	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢	重ね重	縦器	10.4			山合模。塗付。 9の底に墨わざある。	文様: 青色	良好	高台~体部の片幕式時代
23	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢?		縦器				山合模。塗付。 (外) 招き文様。	文様: 青色	良好	体部~口縁部の片幕式4年~
24	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢	道杯	縦器	5.2		2.2	持・島・蟹(凸部分)が底面の剥離を はたす。	縫: 底白色 縫: 淡黄色	良好	1/2連存。
25	トレンチ8からトレンチ9まで	—	鉢	無鉢	縦器	25.8	17	12.2		縫: 貝灰白色 縫: 茶色	良好	2/3連存。

参考文献: 東京都立歴史博物館「新宿区内古町遺跡調査会」  
【東京鳥居原区 古町遺跡一般調査報告書】第Ⅱ分冊<遺物篇> (1992)

第1表 出土遺物観察表①



12



13



14



15



16



17



18



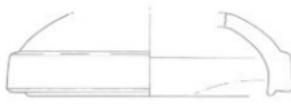
19



20



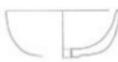
23



21



22



24



25

(12~24) 0 10cm

(25) 0 5cm

第23図 野坂峠越 遺物実測遺物 (2)

## 7. 自然科学分析（年代測定）

本地点の石敷きの造成年代を明らかにするため、平成14年度において文化財調査コンサルタント（株）に遺構内より検出された炭片の年代測定を依頼した。炭片の採取地点は、トレチ6で第15図に示している。その調査結果を以下に報告する。

年代測定方法は、AMS（加速器質量分析）法により、タンデム型イオン加速器を用いて<sup>14</sup>C濃度を測定する。

<sup>14</sup>C年代測定方法（AMS法）の原理は下記である。

大気圈上層で熱中性子化した宇宙線が窒素原子と原子核反応 ( $^{14}\text{N} + \text{n} \rightarrow ^{14}\text{C} + \text{H}$ ) を起こして生成される放射性炭素 (<sup>14</sup>C) はCO<sub>2</sub>として炭素リザーバー（大気1.6%、腐植2.6%、生物圈0.8%、浅海2.0%、深海93%）に貯蔵され、一方では5568（5730）年の半減期で $\beta^-$  壊変をおこす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される<sup>14</sup>Cの初期量は、それぞれの生命活動の行われたリザーバーにおける<sup>14</sup>Cの平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の<sup>14</sup>C濃度を測定し、現在の<sup>14</sup>C濃度とくらべることにより、その生物が死んでから現在（ただし、1950年を現在とみなす）までの経過年数がわかるというものである。

測定結果は第2表のとおりで、測定年代・ $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代・曆年代の年代値を示してある。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。<sup>14</sup>C濃度が環境・時代に関わらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568年）を用いて計算した値である。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正年代は、<sup>14</sup>C濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\%$ に規格化した<sup>14</sup>C濃度を求め、年代値を算出したものである。上記の年代は、いずれも西暦1950年から遡った年代値を示してある。

一方曆年代は、時代（時間）と共にランダムに変化している大気中二酸化炭素の<sup>14</sup>C濃度を樹木の年輪や海底堆積物の縞状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年代校正データ（INTCAL98）を用いて、校正したものである。

その成果から、石敷遺構の造成土中の炭から得られたAMS年代（曆年校正年代）はAD1500～1670であり、発掘成果から推定されたおよそAD1600年頃という年代観と矛盾しなかった。したがって今回の測定結果は、およそAD1600年頃に石敷遺構が造成されたとする発掘成果からの推定を裏付けるものであった。

文化財調査コンサルタント株式会社 渡邊 正巳

No.	整理番号	測定年代 (y BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正 <sup>14</sup> C (y BP)	曆年代 <sup>*1</sup> (cal y.)	測定番号 (Beta-)
1	TST6-1	280±40	-24.7	280±40	AD1500～1670	178976

第2表 年代測定分析表

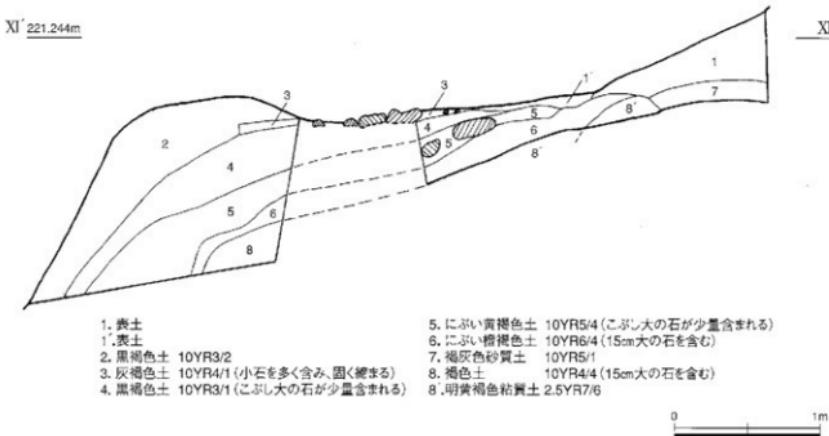
\*1: 2 sigma, 95% probability

### 第3項 第3調査地点

本調査地点は、県道柿木・津和野停車場線の整備予定区間の南側で全長約200mである。第4調査地点に向かって急な上り坂勾配（約15%）となり、第2調査地点とは異なり全体的に右敷き等の遺構は少ない部分であった。そのため全面の発掘調査を行わず、任意に6箇所のトレンチを設定して街道の確認を実施することにした。その内、街道の特徴がよくわかる3つのトレンチについて以下述べることにする。

#### 1. トレンチ11（第24・25図・図版19）

本トレンチは街道に対して垂直に、幅1mで設定した。そして、土層堆積状況から判断すると、西側の山の斜面を「L」字状に切り取り、東側へ盛土して整備されている。以上のように道の半分が切り土、もう半分が盛土という工法になっている。このことは道幅（3m）を整備するために山側を掘削する作業が困難なため、約1.5m切り取り、その土を利用して反対側に盛ったと考えられた。そして盛った部分は地盤が弱いため20~30cmくらいの石を敷いて強化している所が一部残っている。また、第7・8層の灰黄褐色粘質の土を固め路面にしていたと考えられた。側溝については、明確に残っておらず、僅かに窪みが確認できる程度であった。道幅は約3mを測る。



第24図 野坂峠越 トレンチ11土層堆積図



第25図 野坂峠越 第3調査区 路面実測図

## 2. トレンチ13 (第25図・図版20)

本トレンチは、街道に対して垂直に幅約10mで設定した。この調査した部分はかなりの急勾配であった。数cmの表土を掘ると、すぐに岩盤が露出するといった現状であった。この地点もトレンチ8と同様に西側の山の斜面を「L」字状に切り取り、東側へ盛土して整備されている。

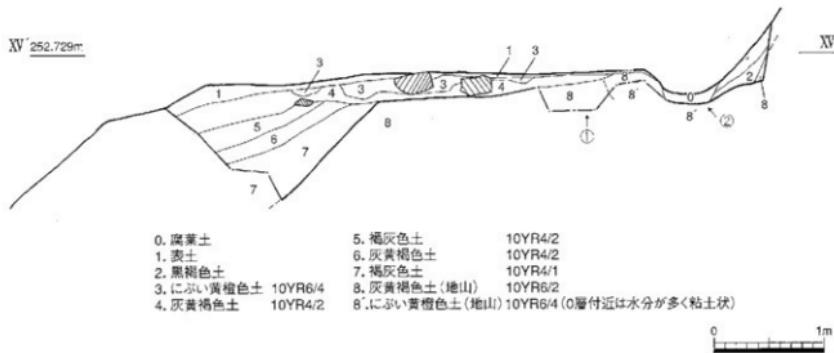
盛土部分は、土の流出をおさえるために谷側に大きな石を置き、また表面にも約20cmの石を敷いている。当時の路面の状況であるが、岩盤の上面をどのように整備していたのかについては判らない。

側溝については、山側に岩盤を少し彫り込んだ形で作られている。また、この岩盤部分に雨水等が上から流れないように横断溝も整備されている。

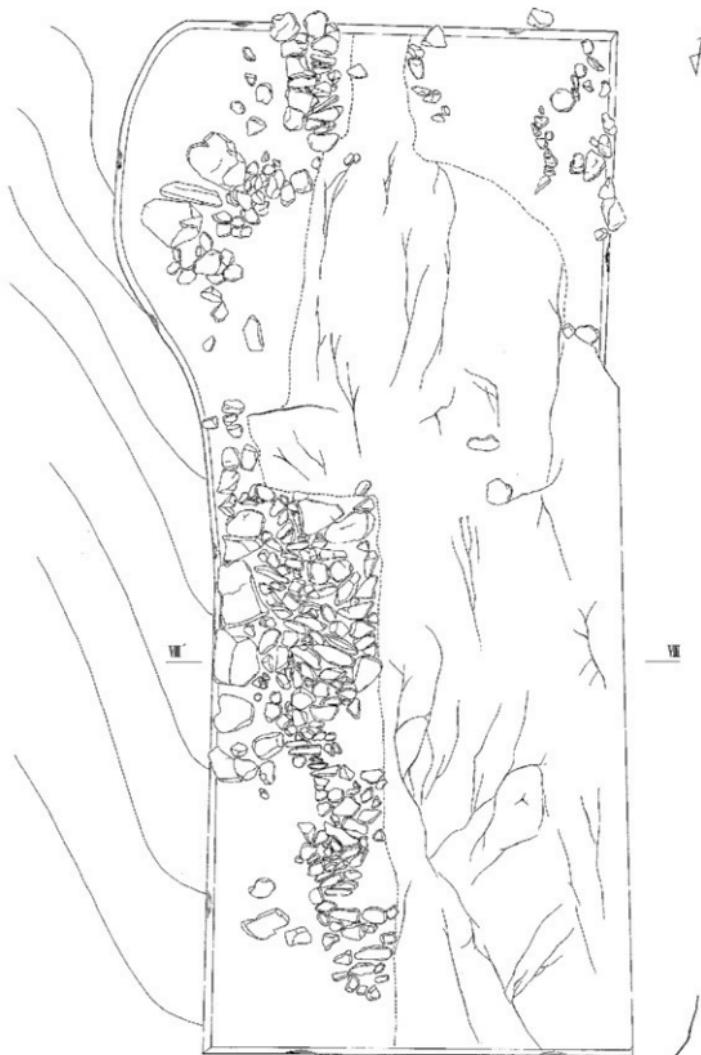
## 3. トレンチ15 (第25・26図・図版22)

本トレンチは、他のトレンチでも確認されたように西側の山の斜面を「L」字状に切り取り、東側へ盛土(第5・6・7層)して整備されている。路面はおよそ3層になるのではないかと想定した。

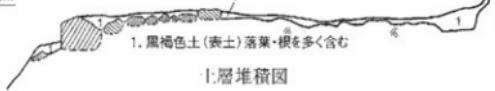
側溝については、土層でも見てとれるが2つ確認できる。①の側溝が古い時代のものではないかと判断した。その当時は道幅も約2mであったと考えられる。そして、新しく②の側溝を埋める形で拡張され最終的に①の側溝を作り道幅も約3mになったと思われる。



第26図 野坂峠越 トレンチ15土層堆積図



標高 240.945m



土層堆積図

第27図 野坂峠越 トレンチ13実測図

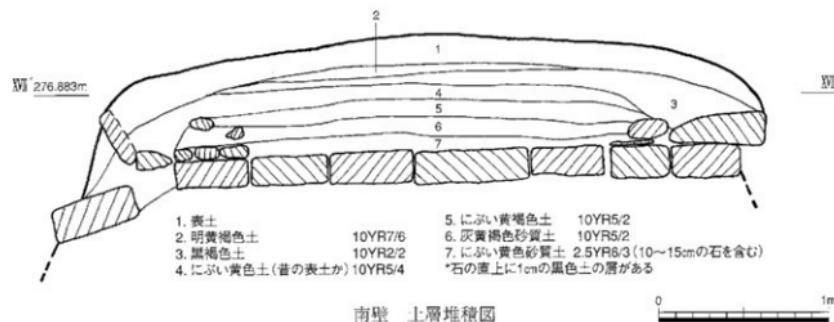
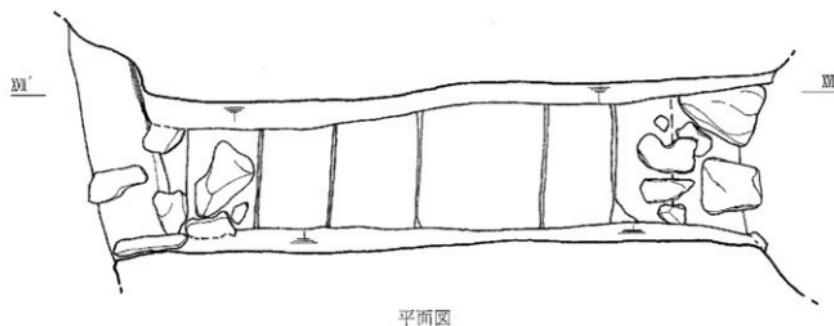
#### 第4項 第4調查地点

本調査地点は、第3調査地点より南へ約500mの区間である。その内3箇所のトレンチを設定し発掘調査を実施した。

### 1. トレンチ17 (第28図・図版26)

本トレンチは、桂川に流れでる谷の部分に1mの幅を設けた。調査前において谷の北と南側に石垣が組んでいるのが確認できた。石垣の間隔は約2mで、この石垣に被せる形で8枚の石板（蓋）が敷いており、おそらく石製暗渠であると判断した。石板のサイズは統一されておらず幅は約40cm~60cmで、厚さは20~30cmを測り、表面はノミ等で加工されていた。

実際の街道の路面は、この石板（蓋）より約30cm上面になり、そのことは上層堆積図でも判断できる。石板（蓋）の直上には黒色粘質土の層が1cmほどあることが確認できた。そして両端から土が流れないように30~40cm位の石を置き、小石を含んだ黄褐色粘質土の土を盛って固めて、その上層面が街道の路面となっていたと考えられた。街道幅は約3mに作られている。



第28図 野坂時越 トレンチ17実測図

## 2. トレンチ18（第29図・図版27）

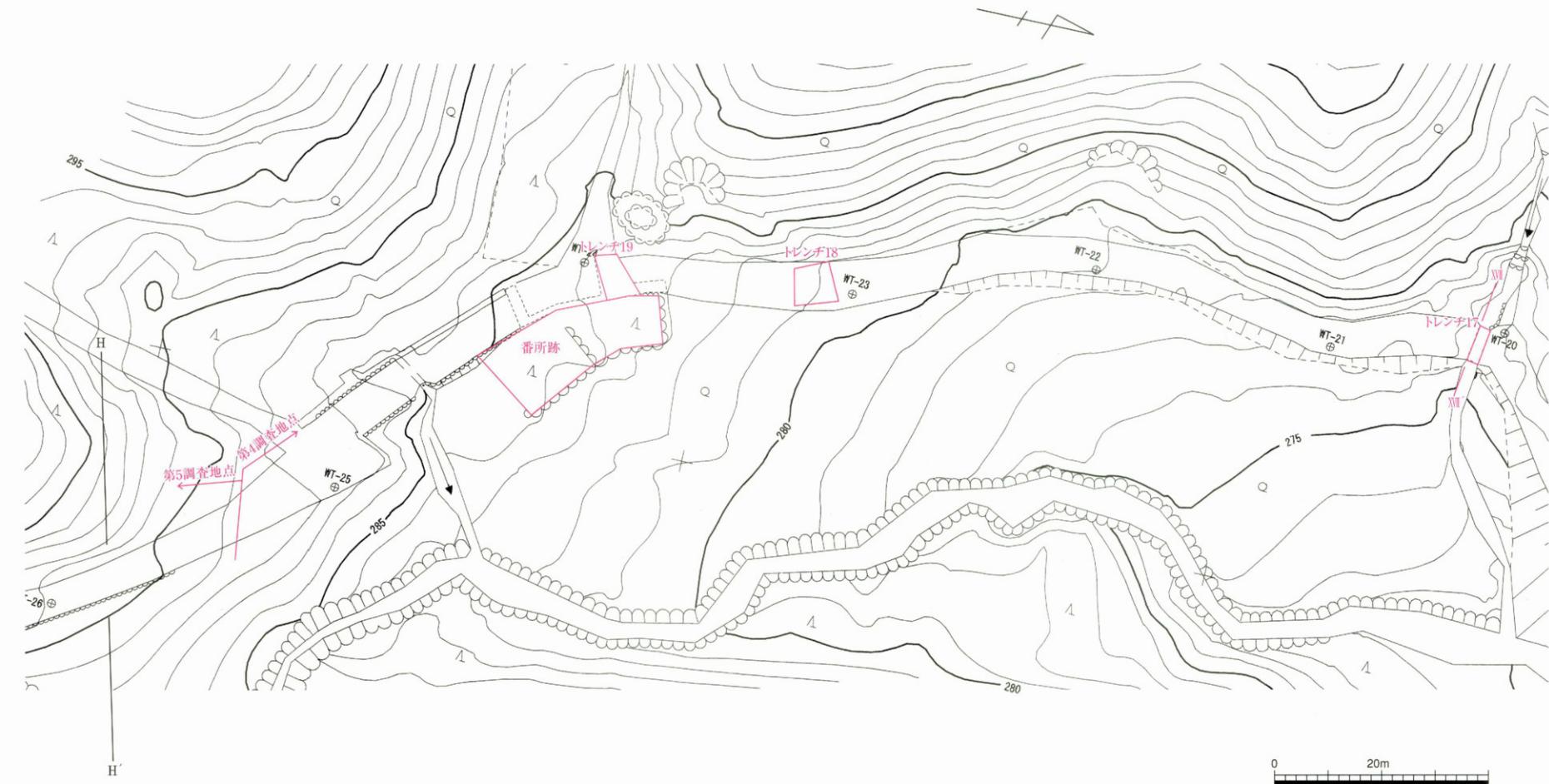
本トレンチは、3.6m幅を設定して調査を実施した。勾配10%の少し上り坂になり、西側の谷から水が流れるため路面の状況は悪い状態であった。

数cmの表土を掘ると、人為的に配列された石組みが検出された。当初は石垣遺構と思われたが、約50cmの石が斜めに配石されており、側溝から川側へ排水するための横断溝であることが解った。溝の幅は約20cmを測り約20度の角度で街道を横断している。しかし、この溝の上がどのようにになっていたかは解らないが、おそらく何らかの蓋がしてあったと思われる。

また、本トレンチよりトレンチ19にかけて道幅が約4mを測る。なぜこの区間だけ道幅が約1m広くなるのか確かなことは言えないが、おそらく番所（関所）が付近にあるために道幅を広く設けたとも考えられた。



第29図 野坂峠越 トレンチ18横断溝実測図



第30図 野坂峠越 第4調査地点路面実測図

### 3. トレンチ19（第30図）

本トレンチは、番所跡と思われた正面側の所に設けた。立地的に西側に大きな谷があり、そのため谷水が多く集まるところでもあり、トレンチ18と同等の横断溝が作られていた。しかし、保存状態があまり良くない状態であったため、溝としての機能はしていないが溝の蓋が確認できた。このことからトレンチ18においても溝の蓋が当時あったと考えられた。

### 4. 番所跡（第30・31図・図版28）

今までのところ、番所（関所）が何処に存在していたかは定かではなく、幾つかの候補地はあったものの確定するものはなかった。

そして今回の調査で、この地点が番所ではないかと判断できる遺構等が確認されたのでそのことについて最初に述べることにする。まず一つ目として現状が石垣で作られた宅地状であること。二つ目として、この土地が登記簿（明治期）では宅地であること。三つ目として、この地点において道幅が約4mとなり、その前後の道幅約3mであるから1mも街道幅が広く作られている点があげられる。四つ目として、井戸が確認されたことである。街道の飲み水として使用もされていたのであろうが、番所に常駐する人にとっても重要なものである。

最後にこの場所の位置が重要になる。つまり国境からどのくらいの距離に番所が設けられたかが問題になる。現在確認されている長州藩の番所を調べると、津和野藩との国境から約500mの所に設置している。そして本地点も国境から約500mの所であり長州藩側とほぼ同位置になると、前述したその他のことから総合的に判断して、この場所が番所（関所）ではないかと考えられた。

番所跡と判断した敷地は、南北9m、東西に5mと、南北7m、東西に7mの平坦な方形が二つ隣接した形になっており、街道と並行に立地する。二つの敷地は南側が一段高くなっているので敷地の面積から判断すると二間三間の家が建てられる。北側は形が変則であり小さな建物がやっと建てられる敷地であり、蔵もしくは小屋といったものであった可能性が高いと判断した。

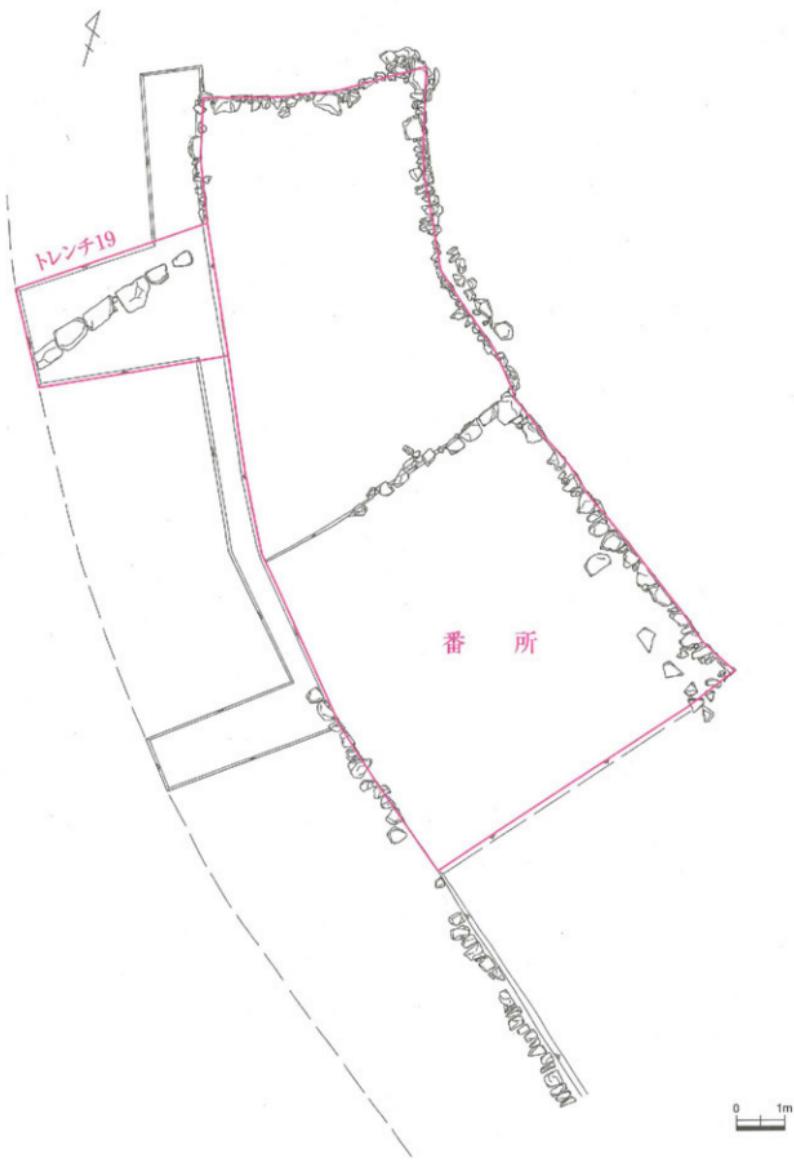
そして敷地内の草木を除去すると、礎石のようなものを確認することができた。しかし、規則的に並んでいるわけではなく、南側の敷地の東端に比較的大きな石が3個あるだけであった。現在、この土地には杉が造林されているため、おそらく造林時に礎石等は除去された可能性が高いと断定した。

最後に出土遺物についてであるが、陶器器類が6点ほど確認された。

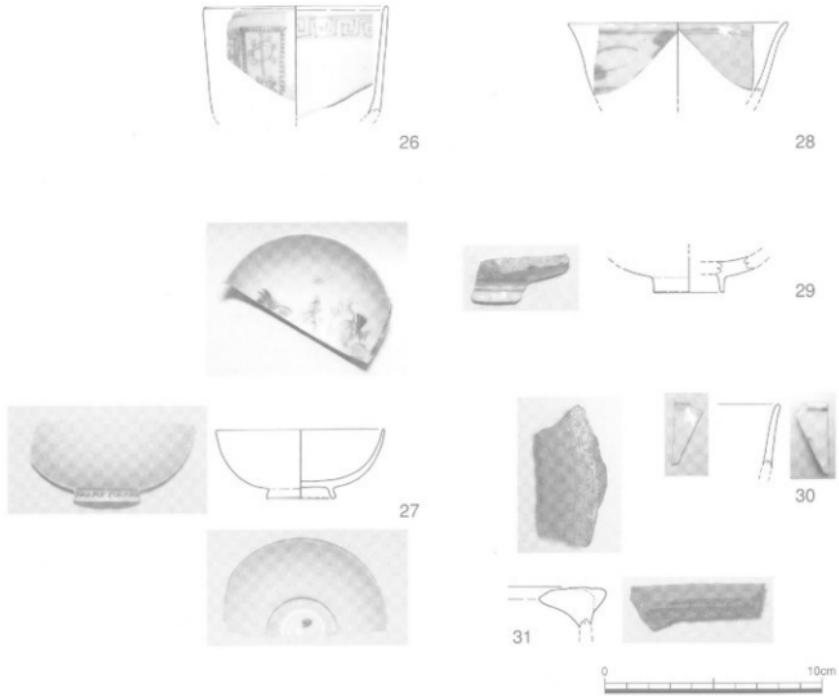
出土遺物の内訳は、番所跡表採が2点（26・27）とトレンチ19出土の4点（28～31）である。以下詳細を述べることにする。

26は、丸形の碗で内側には色絵が施されており、「寿」という字が確認できる。27は、瀬戸美濃の磁器の碗で染付が施されている。26・27どちらも明治時代初め頃の作と考えられる。

28・29・30は19c頃の肥前で製作されたと考えられる。いずれも染付が施されている。  
31は、唐津焼の半壺である。口縁部であるが、破片であったため大きさは不明である。



第31図 野坂峠越 番所（番所）平面実測図



第32図 野坂峠越 遺物実測図（3）

件名 番号	出土 地点	層 場所	形質	器種	胎質	口徑	底径	法量 (cm)	形態・手法の特徴	色 調	胎土 焼成	備 考
26	番渓（開削跡）	表揮	鏡	小鏡	磁器	8.2			縦付。裏面墨書き。	文様：青色	良好	口縁～体部の片 咀歎切目
27	番渓（開削跡）	表揮	鏡	小鏡	磁器	7.5	3	3.1	丸形。色絞。 (内) 伝記に「海」。	文様：(内) 灰青色、明青灰色 (外) 青色	良好	口縁～高台部の片 1/2道存。明治時代初め

28	トレンチ19	—	鏡	磁器	10.2				鏡反形。染付。 脇前。	文様：青灰色	良好	口縁～体部の片 19c
29	トレンチ19	—	鏡	磁器		3.2			縦付。 脇前。	文様：青灰色	良好	高台部の片 19c
30	トレンチ19	—	鏡	磁器					鏡反形？染付。 脇前。	文様：明青灰色	良好	口縫部の片 19c
31	トレンチ19	—	鏡	手鏡	磁器				透溝。	文様：暗褐色	良好	口縫部の片

参考文献：東京都総務局 草加市内藤町遺跡調査会  
「東京都新宿区内藤町遺跡5号標盤從業事に伴う緊急発掘調査報告書」第Ⅲ分冊<遺物編>（1992）

第2表 出土遺物観察表②

## 第5項 第5調査地点

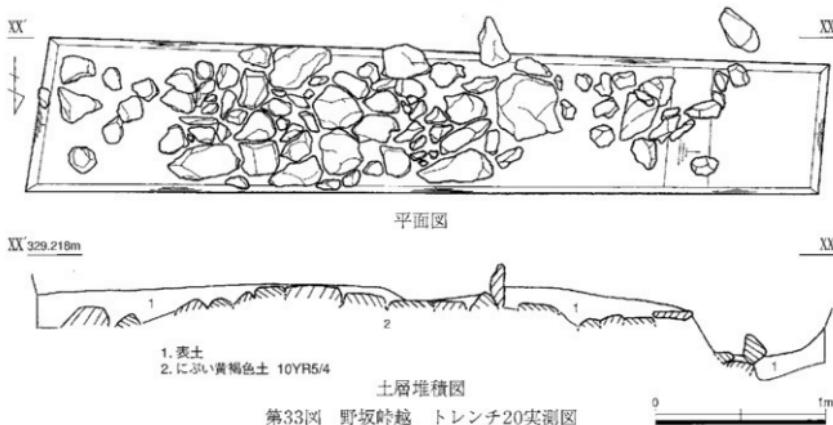
本調査地点は、第4調査地点より南へ向かい旧国道の接点までの区間である。その内5箇所のトレーニングを設定し発掘調査を実施した。この調査地点では、中座地区と旧国道を結ぶ町道によって、一部山陰道が分断されている。

### 1. トレーニング20 (第33・34図・図版32)

本トレーニングは、番所から約170m南側へ向かった所に設定した。道幅は約4mで、急な上り坂で勾配約19%である。数cm表土を掘ると、比較的平らに敷き詰められた石疊が確認できた。

第2調査地点の石疊とは違い、石の間からは粘土質の土が確認できなかったことから、この付近では、石疊の上を歩いていたものと考えられる。

石疊は中央部分を中心に敷き詰められており、第2調査区で見られたような側溝に伴う石は確認できなかった。そのため、側溝の幅および深さは断定できなかった。



### 2. トレーニング21 (第35・36図・図版33)

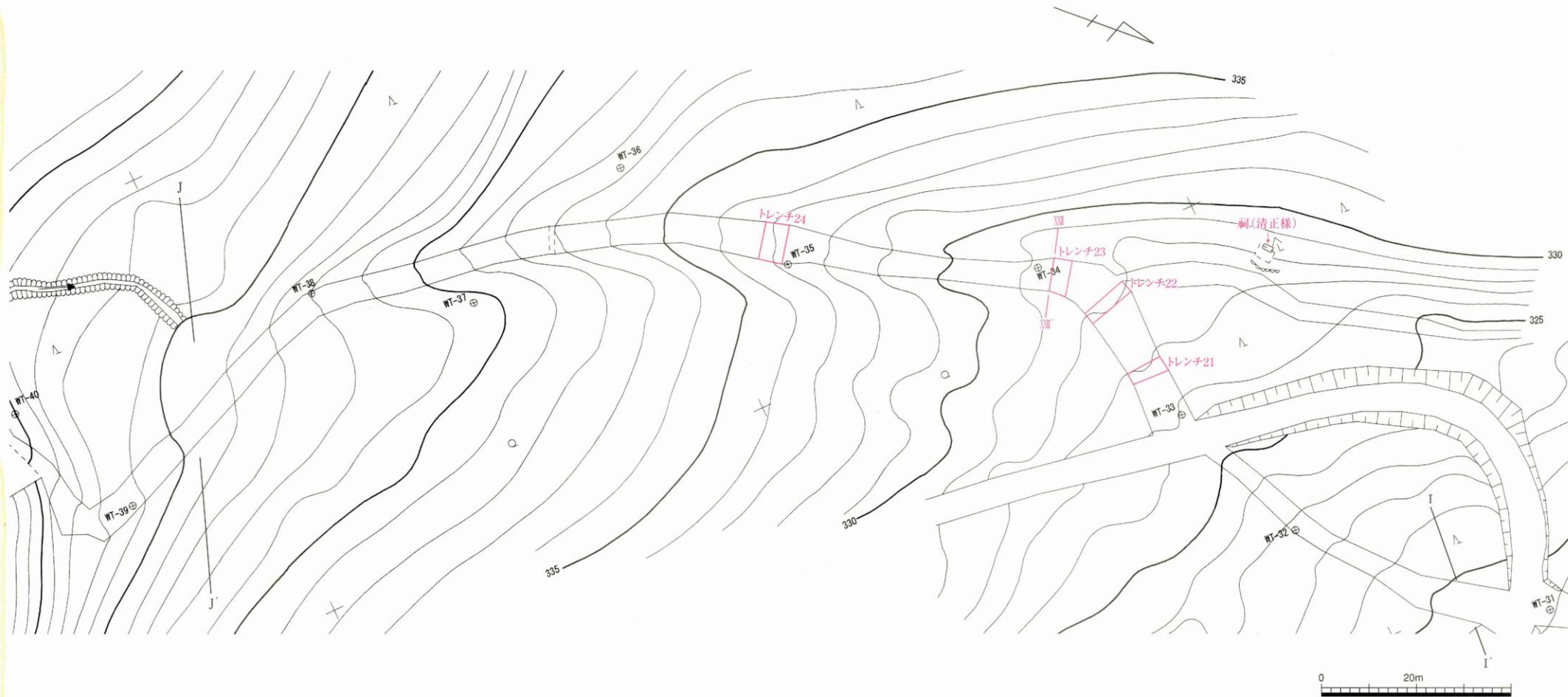
トレーニング20からトレーニング21の間が、町道によって一部分断されており、トレーニング21からトレーニング23までは比較的平らな地形になっている。

本トレーニングも表土はごくわずかで、数cm掘ると石疊が確認できた。石疊の遺存状況はおおむね良好で、道の北側には、側溝のものと思われる石組みが確認できた。道幅は側溝の幅が明瞭でないため、正確にはわからないが、石疊が遺存している幅が約2mであることから、この周辺では3mほどであったと推測される。

なお、本トレーニングを含め、後述するトレーニング22・23・24においても、第2調査区の石疊とは異なり、平らな石が敷き詰められ、石の間に粘土質の土が確認できなかったことからも、当時から石疊そのものを利用していた可能性が考えられる。



第34図 野坂峠越 第5調査地点路面実測図（1）



第35図 野坂峠越 第5調査地点路面実測図（2）

また、本トレンチは道の南側にも側溝のような溝が確認できたが、調査全体を通して両側に側溝がある箇所はなかった。しかも、北側のような石組みではなかったことからも、この溝が側溝であったということは断言することはできない。



第36図 野坂峠越 トレンチ21平面実測図

### 3. トレンチ22(第36・37図・図版33・35)

トレンチ21から約7m西にトレンチ22を設定した。山陰道は、本トレンチより大きく南に反れていく。また本トレンチより北西へ約15mのところには、清正様と呼ばれる石像を奉る祠がある。

本トレンチもわずか数cmの表土の下に石疊が確認できた。しかし、明確に道幅を特定できるような石組みや側溝は確認出来なかった。トレンチの中央部分を中心に10cm~30cmの石が約2m敷き詰められている。

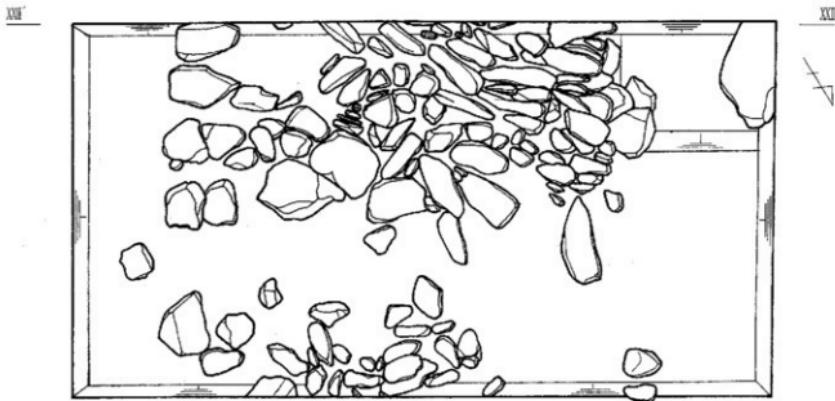


第37図 野坂峠越 トレンチ22平面実測図

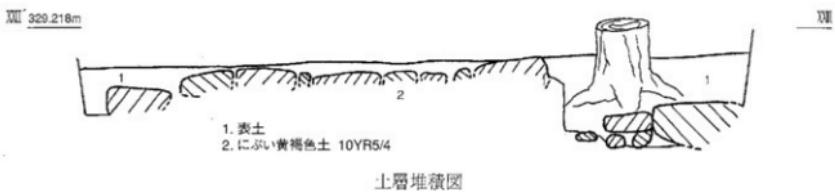
#### 4. トレンチ23 (第35・38図・図版33・35)

トレンチ22から約4m南にトレンチ23を設定した。トレンチ21から本トレンチまではあまり勾配がなかったが、本トレンチを過ぎると勾配14%の坂道が約130m続く。

本トレンチは道の東側に石列があり、石疊は約2mであった。側溝らしきものが土層堆積図では確認できるが、深さははっきりしなかった。その上、トレンチの北半分で石骨が途切れ、土層堆積図で確認できていた側溝がなくなった。のことと前述したトレンチ22から、この付近では石を組んだ側溝は作られず、簡単な溝程度のものがあった可能性が考えられる。



平面図



第38図 野坂峠越 トレンチ23実測図

#### 5. トレンチ24 (第35図・図版35)

本トレンチはトレンチ23から続く坂道の途中にあり、トレンチ23より南西に約30mのところに設定した。本トレンチでは、表土から一部石疊が露出している箇所があった。また、大きな石が道の東側に利用され、ここでも平らな石が中央部の約1.8mの幅で敷き詰められていた。



第39図 野坂峠越 第6調査地点路面実測図（1）



第40図 野坂峠越 第6調査地点路面実測図（2）

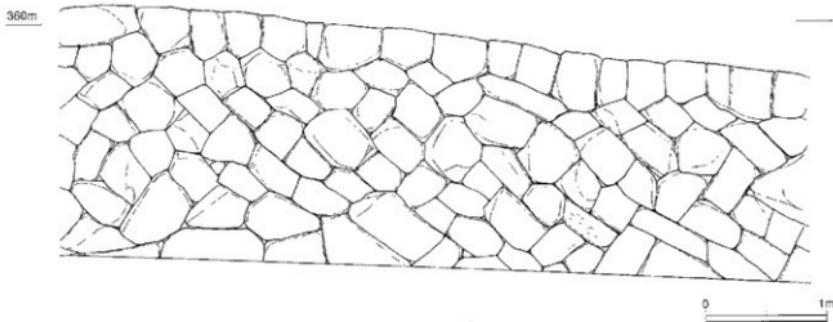
## 第6項 第6調査地点（第39・40図・図版36・37）

本調査地点は、旧国道に接した所から国境までの区間である。本調査地点は、旧国道（町道）で整備されているため、試掘等の発掘調査を実施することはできなかった。しかし、地形的に判断して、おそらく当時の山陰道をそのまま利用したのではないかと考えられた。

旧国道と合流した地点で、街道の東側には二間茶屋があったと言われている場所がある。当時の面影は失われていて、現在杉林となっているが、二間の茶屋が建てられる平坦な場所になっている。

また、茶屋のあった地点の反対側（西側）には、明治19年に国道として整備したときの石垣が県境を越えて山口県側へと続いている。高さは低いところで約3.57m、高いところで約3.63m、県境まで約174mを測る。東側にも西側同様に途中から石垣が設けられている。これらの石垣は、山口県側にも続いており当時のまま保存状態も良く現存している。

そして、その石垣の上には、縦188cm、横125cmの国道工事の記念碑が建てられており、そこには「明治十八年（1885）五月起工翌年十二月竣工、工費壹萬三千六百三拾四圓九拾五錢五厘」と銘がある。



第41図 野坂峠越 石垣立面図（明治期）

## 第4節 土質調査

### 第1項 調査目的・調査内容

#### 1. 調査目的

調査は、津和野町中座地内において発掘調査により確認された山陰道（野坂峠越）について現地調査を行い、当時の山陰道の構築状況を考察するための基礎資料を得ることを目的とする。

#### 2. 調査内容

- ・試料採取（設計C B R試験） : 1試料
- （塩素含有量試験） : 2試料
- ・含水比試験 : 1試料
- ・設計C B R試験 : 1試料
- ・塩素含有量試験 : 2試料
- ・ポータブルコーン貫入試験（野坂峠） : 3地点（9箇所）

### 第2項 調査方法

#### 1. 試料採取

設計C B R試験の試料は、路線を代表して盛土箇所の土質を用いることとし、地表面に確認される円礫層の下位の土質とする。塩素含有量試験の試料は、塩素分の含有量を比較することを目的としているため、盛土箇所と切土箇所の2種類の土質を用いることとする。

#### 2. 室内土質試験

室内土質試験は、物理特性及び力学特性を把握するために実施する。

- 1) 含水比試験・・・J I S A 1203:1999に基づく試験方法
- 2) 設計C B R試験・・・J I S A 1211:1998に基づく試験方法
- 3) 塩素含有量試験・・・J S F T 12:1968に基づく試験方法

#### 3. 現地試験

現地において簡易的に支持力特性を把握するために実施する。また、試験箇所については土倉の変化を確認する目的で、切土箇所、盛土箇所、切盛箇所で行うこととした。

- 1) ポータブルコーン貫入量試験・・・J G S 1431-2003に基づく試験方法

### 第3項 調査結果・考察

#### 1. 調査結果

##### 1) 室内土質試験結果

含水比試験、及び設計C B R試験結果を表1に示し、塩素含有量試験結果を表2に示す。

採取位置	含水比(%)	乾燥密度(t/m <sup>3</sup> )	CBR値(%)
盛土箇所（野坂峠）	30.23	1.496	6.8

表1 塩素含有量試験結果

試験試料	塩素含有量cl(mg/kg)
盛土（野坂峠）	23.0
切土（野坂峠）	9.0

表2 塩素含有量試験結果



図1 調査箇所図（野坂峠）

## 2) 現地試験結果

ポータブルコーン貫入試験結果を表3に示す。

調査位置	深度	ダイヤルゲージの読み			平均	平均コーン指指数値(KN/m <sup>2</sup> )
		川側	中央	山側		
切土箇所 (野坂峠)	0.00	0	0	0	0	0.0
	0.05	65	70	100	78	547.6
	0.10	70	85	130	95	664.1
	0.15	56	90	—	73	513.4
	0.20	75	100	—	87	609.3
	0.25	100	130	—	115	801.2
	0.30	110	—	—	110	766.9
	0.35	120	—	—	120	835.5
	0.40	130	—	—	130	904.0
切土箇所 (野坂峠)	0.00	0	0	0	0	0.0
	0.05	130	130	130	130	904.0
切盛箇所 (野坂峠)	0.00	0	0	0	0	0.0
	0.05	60	100	65	75	527.1
	0.10	92	130	130	117	814.9
	0.15	130	—	—	130	904.0

表3 ポータブルコーン貫入試験結果

小型道路舗装計画交通量(台/日・方向)	設計CBR	表層・基層		上層路盤 粒土調整碎石	下層路盤 クラッシャラン	TA'	合計厚さ
		加熱アスファルト 混合物					
3,000≤T	3	5		15	35	19.0	55
	4	5		20	25	18.3	50
	6	5		10	30	16.0	45
	8	5		15	15	14.0	35
	12以上	5		10	20	13.5	35
650≤T<3,000	3	5		15	20	15.3	40
	4	5		15	15	14.0	35
	6	5		10	15	12.3	30
	8以上	5		10	10	11.0	25
300≤T<650	3	5		10	20	13.5	35
	4	5		10	15	12.3	30
	6以上	5		10	10	11.0	25
T<300	3	5		10	15	12.3	30
	4以上	5		10	10	11.0	25

設計期間10年、単位:cm

小型道路における舗装計画交通量とは、設計期間内の平均的な1日1方向当たりの小型貨物自動車交通量をいう。

(小型貨物自動車：最大積載量2,000kg以下かつ総排気量2,000cc以下の車両)

「舗装設計施工規針[平成18年度版]」社団法人 日本道路協会JP211」

表4 舗装断面の一例

## 3) 塩素含有量試験

試験結果では、塩素分Clの含有量は切土材料で9.0mg/kgであり、盛土材料では23.0mg/kgであった。結果的には、数値は2倍以上の差が出ているが、試験を実施した機関の説明では、この数値は自然土にも含まれている濃度の数値であり、にがりや海水が混ざった土質であるとは確定できないということであった。

#### 4) ポータブルコーン貫入試験

試験結果では、貫入深度は総括で0.10m～0.40mと浅く、路線自体も良く締固まつた状態で、コーン指標値も547.6kN/m<sup>2</sup>～904.0kN/m<sup>2</sup>を示す。表5に当てはめても15t級の普通ブルドーザーが走行可能な支持力を有する状態であった。

建設機械の種類	コーン指標 qc kgf/cm <sup>2</sup> (kN/cm <sup>2</sup> )	建設機械の接地圧 kgf/cm <sup>2</sup>
超湿地ブルドーザー	2 以上 (200)	0.15～0.23
湿地ブルドーザー	3 ～ (300)	0.22～0.43
普通ブルドーザー(15t級程度)	5 ～ (500)	0.50～0.60
普通ブルドーザー(21t級程度)	7 ～ (700)	0.60～1.00
スクレーブドーザ	6 ～ (600)	0.41～0.56
被けん引式スクレーバ(小型)	7 ～ (700)	1.3～1.4
自走式スクレーバ(小型)	10 ～ (1000)	4.0～4.5
ダンプトラック	12 ～ (1200)	3.5～5.5

「道路土木施工指針」[社団法人 日本道路協会] P47]

表5 建設機械の走行に必要なコーン指標

## 2. 結果に基づく考察

室内試験、及び現地調査試験の結果について各項目ごとに考察を述べる。

### 1) 含有比試験

試験を行った土質は、礫混じり粘性土状を呈し、自然含水比は30.23%であり、比較的高い数値を示す。日本の代表的な土の測定例を表6に示し、比較してみると、洪積粘土や砂質土の範囲内に分布する。

土の種類	沖積粘土	洪積粘土	砂質土	関東ローム	泥炭	まさ土	しらす	黒ぼく
含水比 w (%)	50～80	30～60	10～30	80～150	120～1300	5～20	40～130	30～270
土粒子密度 ps (g/cm <sup>3</sup> )	2.65	2.67	2.70	2.78	1.50	2.6～2.7	2.3～2.6	2.3～2.4

表6 代表的な土の測定例

### 2) 設計CBR試験

設計CBR試験は、当時の路線状況と現代の舗装構成区分を比較する目的で実施した。試験結果は、試験試料に比較的繊分が多く混入しているため、自然含水比が高い例にはCBR値が6.8%と高い数値であった。CBR値6.8%を表4に当てはめると、交通量T<300の設計CBR 4%以上の舗装構成に区分される。

当時の路線は5cm～10cm程度の締固められた表土があり、下位には区間ではあるが礫径20cm程度の亜円～円礫層が敷き詰められている。この礫層は、現代で言う路盤材（上層・下層路盤）に相当すると考えられ、現代の路盤構成と比較すると同程度の路盤厚であると想定される。図2に比較図を示す。

当時の路盤構成		現代の路盤構成	
締固められた表土	5cm～10cm	表層・基層(アスファルト)	5cm
亜円～円礫層	20cm程度	→ 上層路盤 (粒調碎石)	10cm
		下層路盤 (クラッシャン)	10cm

図2 路盤比較図

株式会社コンサルタント 藤井 浩人

## 第5節 まとめ

今回調査した山陰道の野坂峠越は、全体的に良好な形で当時の街道が現存しているといえる。その理由の一つとして、明治以降において道路整備工事から外れたため、当時のままで現代まで残ったからである。そして今回の発掘調査では、今までに全くと言って良いほど知られていなかった街道の構造などが、発掘調査を実施したことにより部分的ではあるが明らかにすることができた。

この峠の特徴として、全長僅か1.5kmではあるが、城下町の入り口に当たる口屋、番所（関所）、国境といった重要な拠点が点在している区間である。そのため、江戸時代において整備に力をいれていったことが今回の調査で明らかとなり、地盤が弱いための石敷き、上り坂での石畳、石製の暗渠、側溝など多くの遺構が確認された。ここで使用された石材は、街道周辺の角閃石安山岩が約7割、流文岩質凝灰岩が約3割の割合であった。特に安山岩は加工がしやすいことも利用された要因であると考えられた。以上のように本調査区は、当時の道路土木工事の技術を見ることのできる点でも貴重な遺跡であるといえる。また、土質調査の結果から当時の街道の強度が高いことが判明し、当時の土木技術の高さを知ることができたのである。

しかし、残念なことに発掘調査地が街道であるため出土遺物が殆ど無く、また現存する文献の中からは、街道の構造や整備に関するものは皆無であった。そのため何時頃から利用され、いつ頃整備されたのかといった点については解明することはできなかった。



第42図 津和野百景 野坂峠

# 第3章 徳城峠越

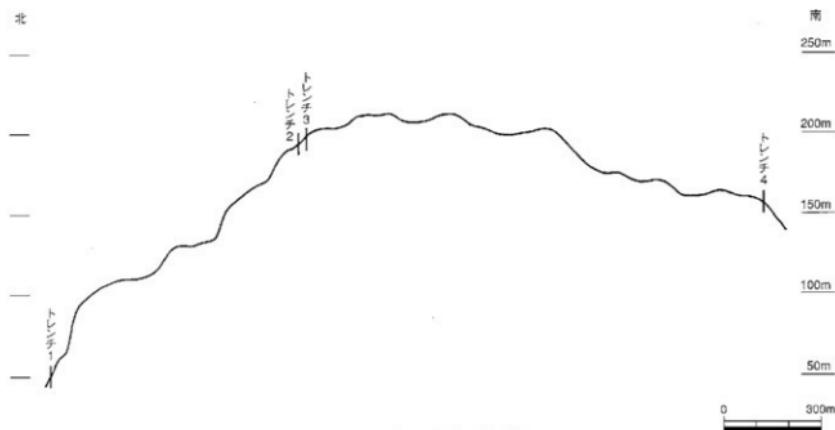
## 第1節 地理的環境と歴史的環境

### 第1項 地理的環境

山陰道（徳城峠越）は、島根県津和野町富田から柳村地内に所在し、本町北側にある峠であり益田市との町境に近いところに位置する（第2図）。調査区周辺の地形は、高津川が東側に位置し南東から北西にかけて流れている。その高津川へ流れる支流が、北側から二俣川・大木川・柳川・程彼川など多くの川が流れおり、そのためにこの地域は谷沿いに集落を形成している山間地である。標高の一番高い山は下瀬山の約350m、高津川沿いでは約40m、谷部の集落は約140mである。

今回の調査対象である徳城峠は、大木川と柳川に挟まれた形の峠である。北側地点の標高は約40m、峠の一番高い所での標高は約210m、そして柳村側の標高は約135mを測る。北側地点から峠までは約1kmであり、急な上り坂で勾配は約18%である。峠は比較的長い尾根道となり約800m続き、約5%の勾配の下り坂となっており全長約3kmである（第43図）。

峠の一番北側には茶屋があったと言われており、そこからは、日本海（高島）や青野山を見ることができた。



第43図 徳城峠越 横断図

## 第2項 歴史的環境

この地域において最も古い遺跡は、柳村にある柿木田遺跡で縄文時代のものである。この遺跡は山陰道のすぐ近くで発見されたもので、石器などが発見され古くからこの地域で人々が生活していたことを証明する遺跡である。しかし、それ以外の遺跡等については、調査を行っていないため確認されておらず多くのことは言えないのが現状であり、縄文時代以降この地域周辺に人々が生活していたかの判断は困難であった。

そして、歴史上確かなものとして表れてくるのは、弘安5年（1282）吉見氏入部以後であり、当初は木部地域に城を構えたと言われている。その後、現在の津和野城を築くことになり、その支城の一つをこの地に築いたのが街道の東側に位置する下瀬山城である。中世期になって、この下瀬山城を中心にしてこの地域は栄えることになり、下瀬山城の支城や当時の石塔等の遺跡が多く点在する。

今回の調査対象になっている山陰道も、おそらく古い時代に作られ利用してきた街道の一つであると思われる。しかし、古代においての山陰道は益田市から海岸線を通って下関に向かっていたと考えられ、吉見氏が津和野城を築くことによって、津和野の町を通る街道が山陰道として整備されたと思われる。江戸時代になるとさらに整備され、津和野の殿様をはじめ多くの人々の往来があったと思われる。また、栗本格斎の『津和野百景』にも徳城岬が選ばれており、江戸時代の名所の一つに上げられている（第45図）。また、文化八年二月十日、伊能忠敬一行は津和野城下町を出発し、この街道を測量しながら通り徳城岬を越えて青原宿場で一泊したと「測量日記」に記されている。

明治以降は、別のルートを主要幹線道として開発されたため、その利用はふたたび庶民が使う道となり、山陰道の一部が現在も町道として利用されている。

この徳城岬は、旧日原町時代に「徳城往還」として町の指定文化財（史跡）に登録され、現在も津和野町指定文化財（史跡）として保護されている。